二十四輩順拜圖會

後篇

下編

バ波4
1810
10-7

特
門 波ハ 4
1810
10-7

金星本
金星本
金星本
梅屋漬

親鸞聖人御舊蹟二十四輩順拜圖會後篇卷之二

目錄

○下総之部
中戸山常敬寺
屈旋山阿弥陀寺
大生天神
雁俣の里来
大高山
彰屋山稱名寺
高栗山法福寺
佐西地法徳寺
釋兒の家跡
一谷山妙安寺
横曽根山西念寺
紙屋雑魚を供する
の里来
大高山願牛寺
彰堯山弘徳寺
玉日宮廟
野田陽宗願寺
鷲子山勝願寺
飛子口
一谷妙安寺
横曽根山光了寺
光徳寺親鸞の家
牛久の里来
柳山弘徳寺
日吳況
古河御城
高柳山光了寺
いさご山
香光明神

法憍寺　霞の浦
勝蔵浦

○常陸之部

西本山光明寺　小潟山三月寺　三月寺の田地
佛名山常福寺　統波山大御堂　一山の奥院　連歌の道場
帰命山如来寺　大師流名号　馬搆　大師　大学の書正外寺
大蛇解脱　板敷山　稲田山西念寺
笠間光照寺

以上

金星本

河州専敎寺　了貞撰

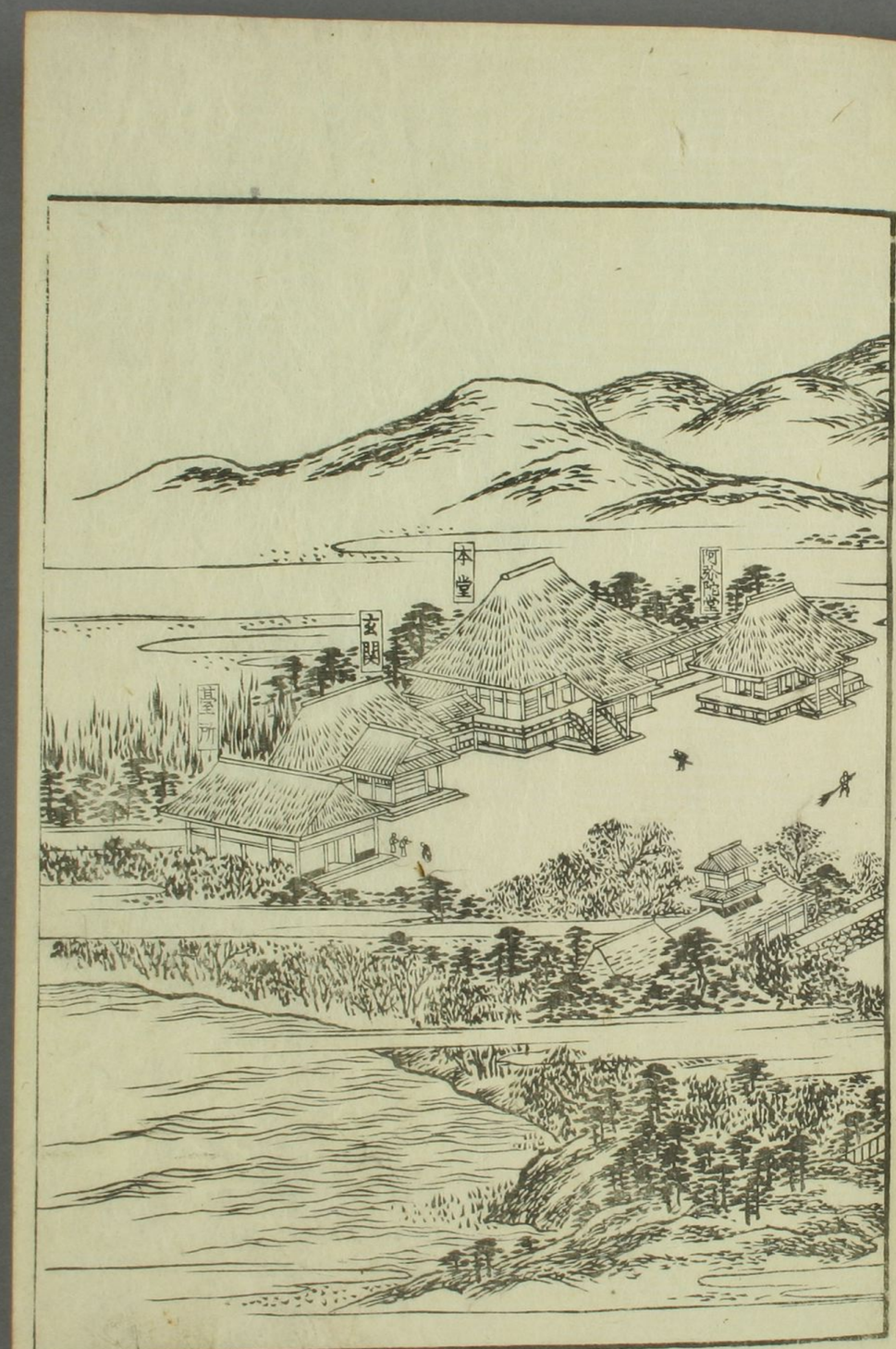
下総國

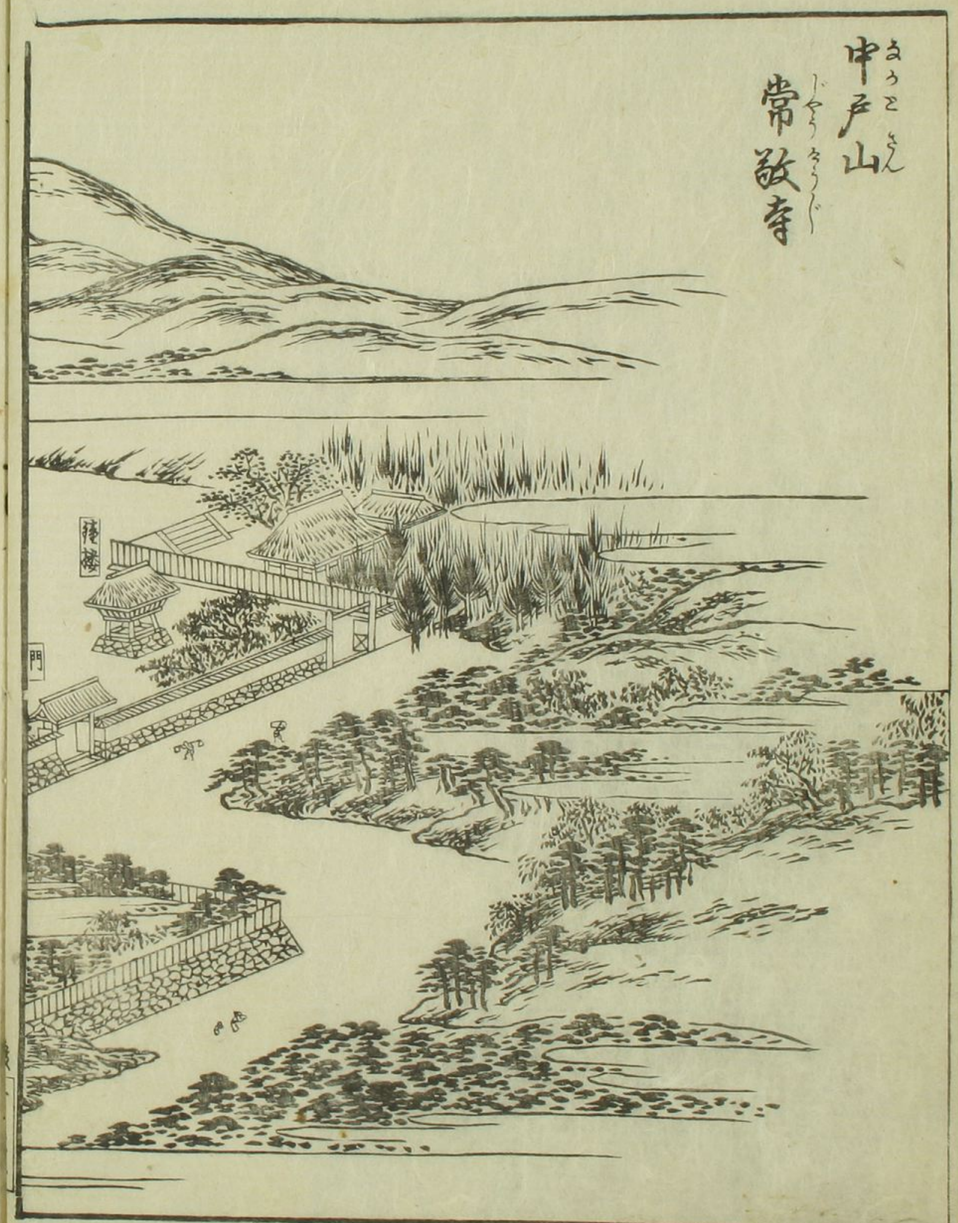
中戸山常敬寺　西流

（今按ずるに古昔拾遺に天富命を求め東に向ひ阿波の郡に率往し給ふ故に郡の名を名づけ給ふ）
（神阿波の郡天日鷲命の神器を奉斎し給ふ故に郡の名を紀の國と云ひ本縁のまゝに結城郡と云ふ）
（上下の郡を結城郡と云ふ故に結城郡の名を結城と云ふ）
（下総國葛飾郡河邊の在関名）
（下総國葛飾郡野方深井郷中戸村）

西光院と称せり関東七箇大寺の一にして高祖聖人の御孫唯善上人の遺跡なり（唯善上人は祖の御息女孫女の御方法号光信尼の御息男にて聖人の御直孫なり）御影堂十間親鸞聖人御真像を唯善上人の御作（或は高山茅庵の作）阿弥陀堂の本尊（高山茅庵の作）尊い定朝の作なり（高山茅庵の作）阿弥陀堂（新堂阿弥陀堂）什宝の法然上人選擇相傳の御影を蒐む（法然上人御自画賛）（聖人御添書あり）

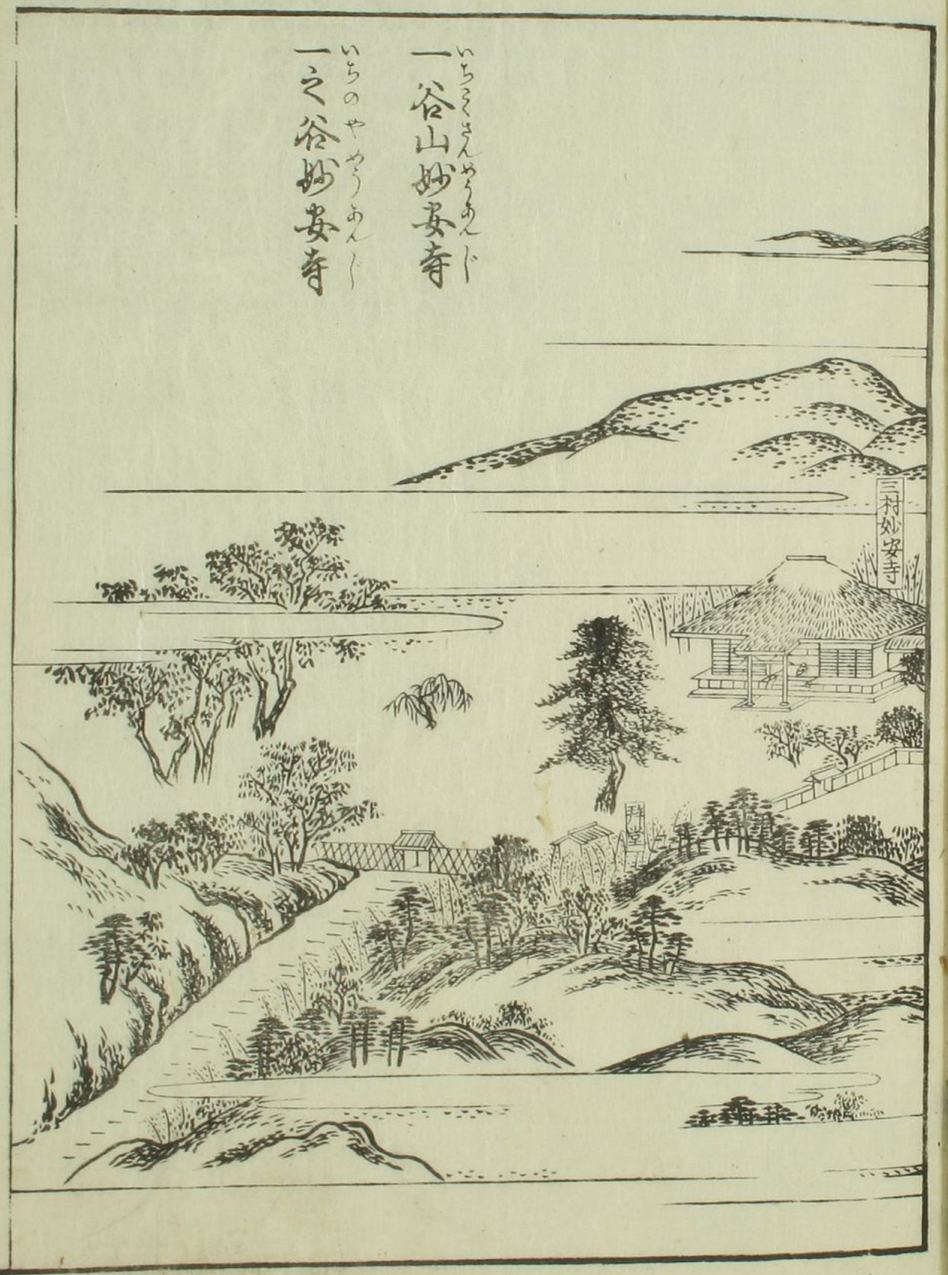
當山の開基を尋ぬれば往時延慶二年の春唯善上人相州より


本堂
阿弥陀堂
玄関
庫所


中戸山
常敬寺
後楽
門

向〻化益あらせらるる若狭軍惟康源く飯依〻給ひ此地う七
堂伽藍を建立〻て上人を寄附せらる花園天皇宣旨を旋て中戸山
西光院の勅号を賜へり代〻法燈とぞ〻相續〻る所
第十世了照の時に至て兵火の為に焼失せし天正年間
豊臣秀吉公小條氏政を征し給ひ後国高田に移りて両寺とも
と二箇寺に分ち一は城後国高田に移りて西寺とも
中戸山常敬寺と稱し
一谷山妙安寺　東流　日図猿橋郡三村にあり
高祖聖人の弟子二十四輩第六一の谷成就御坊の遺跡也
成就坊の伝記当山開基の始末審に未編上野国厩橋妙安寺の伝記の載と所に此に紀さる三村厩橋の妙安寺打とし如来の例
中古不〻に後轉
とて〻も法燈を絶ざるなり成然坊も〻〻当国一の谷と云
不て一宇を建後に聖人と相議て堂趾を賣に従ひ故に聖人
をば〻植給へる松の樹〻く近き比まで尚存せり是を守る
の松と稱せり○霊安い弟尊阿弥陀佛の像幻基の他武い安阿弥の他も
日画像い恵心僧都の筆聖徳太子の筆る歟い雖有も宗祖開
山聖人の御他なり其外蓮如上人御筆の御文多あり
證如両上人御筆の御文多あり
一之谷妙安寺　東流　三村と中戸との中間一のやあり
即成然房住居の地なり当寺い成然房最初建立の所寺内に
成然御坊の墓あり　境内寺院に二ヶ所御遺骨発掘せらる
屈旋山阿弥陀寺　東流　日図日那　長洲にあ
当寺い親鸞聖人の門弟安了房の遺跡なりいろ〻へい三論宗
に屈旋龍山稱名院と号し慧禎法師の草建八世相續し澄慧
の時に天台に改り第十代世安了の時貞應二年高祖聖人

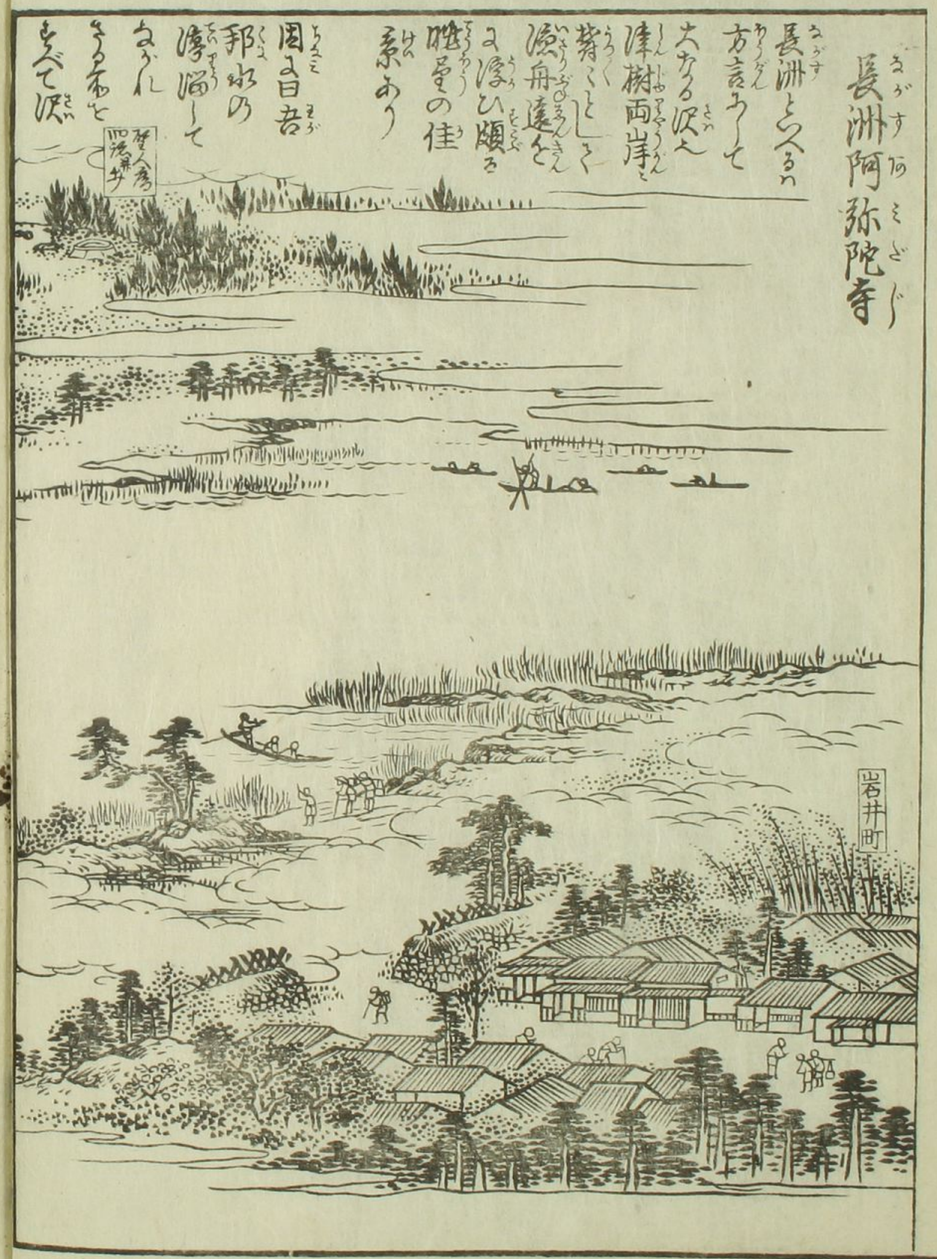
一谷妙安寺
市のやの里


一谷山妙安寺
いちのやめうあんじ
三村妙安寺

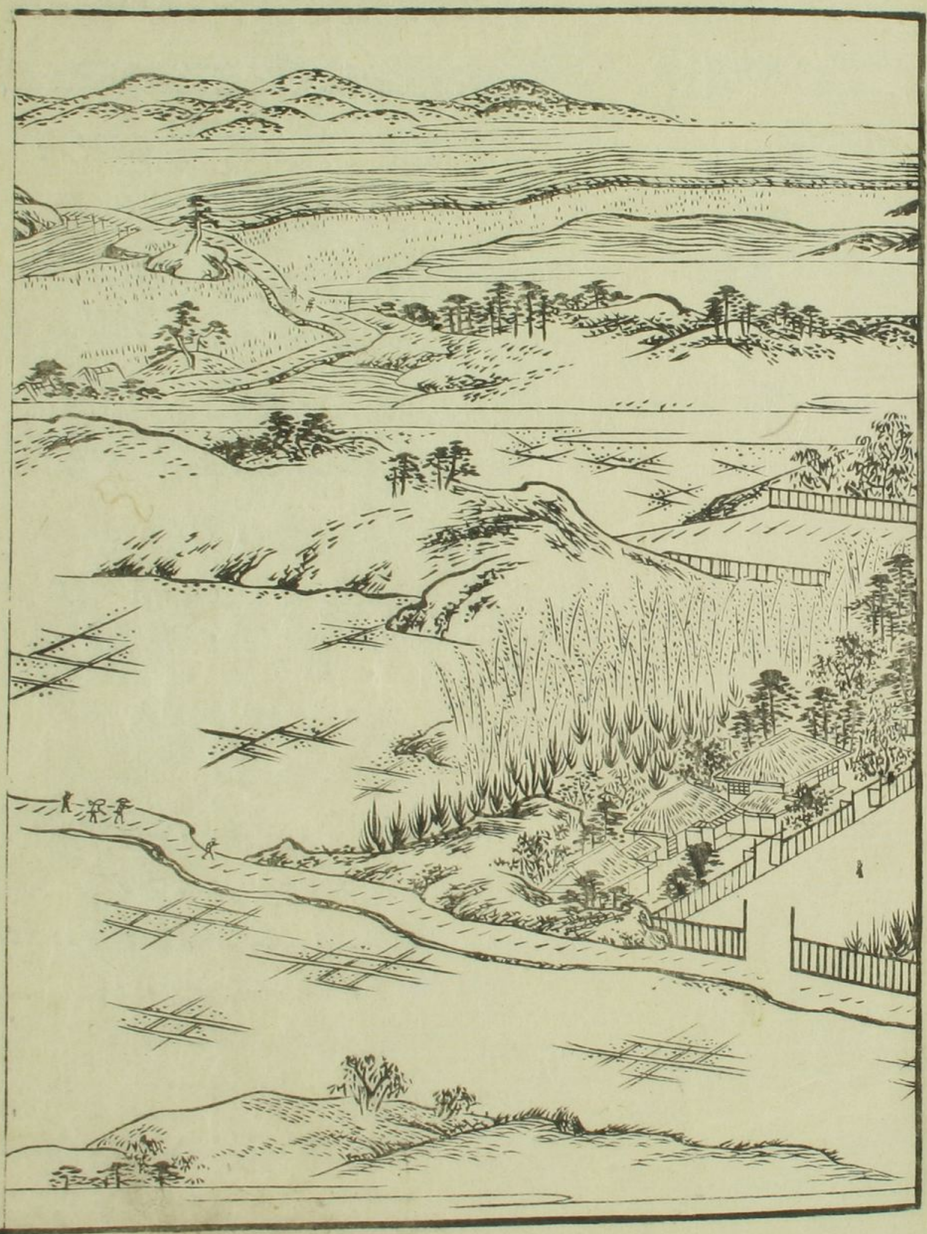
長洲阿弥陀寺

長洲とゝるの
方言うゝて
大なる沢ゝ
津樹両岸に
背くゝとしく
漁舟遠を
ゝ浮ひ頗る
幽景の佳
景あり

因ゝ曰吾
邦水の
湾湖して
ゝゝ
きる有と
ゝゝて沢



ことゝ
長洲の
大沢廣
沢の勢
芦ゝ
倪雲樹ゝ
詩ゝ
洲雲汀樹
曉離々と
ゝる山洲の
ゝゝ沢と
ゝゝ歯
ゝゝ山
長洲
長洲と
書い雅
ゝゝ



極楽山西念寺

よこぞね
横曾根
りんこうじ
聞光寺

齒寺（入鹿）の開法隨喜して御願なり今の堂に真宗
の佛閣とは為て有る○本尊の画像は恵心の筆六字の名号は
高祖聖人の御筆なり○背面掛抹の中に聖人
安彦の四詠及び母あり

極楽山西念寺　東流　月園日郎邊田村にあり

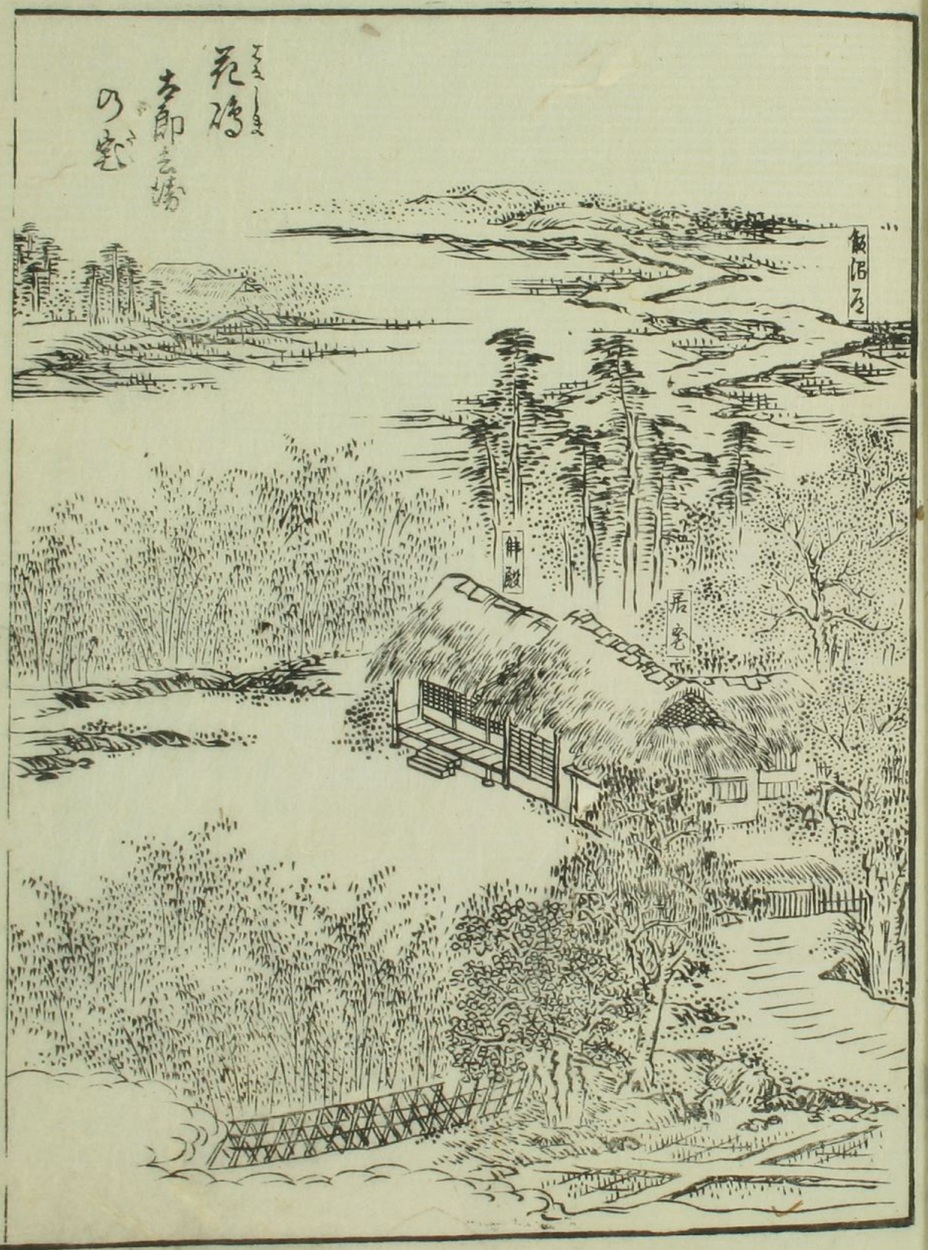
聽衆院と稱し本堂九間に面す阿弥陀如来は運慶の作なり
堂に法然上人の聖徳なる乃至像を安置す○僧坊二區あり
宗祖聖人の御筆なる二十に葉筆七野田西念御坊の黄蹟なり
齒寺はそのかゝ上宮なるみ来幸し給へる舊跡なれば聖徳な
と号して天台宗の霊場なりしが高祖聖人齒國外化の出時
齒院の寺勢真證法師聖人に帰依なり御筆なる絵
淨土真宗の佛閣とは為て有る

（建暦三年叶寺と再建せり故に此寺の氏神なる元元應三年空徳寺大勅進真覚福安門山へ出と云せり
洪鐘の銘に元應三年酉と記せり建暦年中寺号を西志寺と改むるなり○西念寺の名編信
真宗の佛閣なる故田の西念此に来て化導なられより
其後三世の寺勢真覚房元

冊長命寺の下に記し信濃の長命寺の西流二十
に葉筆七野田に屬せり　什宝は聖人真筆の連座の
御影を安置せり　真宗の像

撫牛根開光寺　東流　坊舎二區　月園岡田郎老田宏撰　牛根報恩寺村にあり

開基は性信上人建保二年當山を建立の御教堂九間に面す
尊阿弥陀佛は春日の作なり又列祖堂は阿弥陀佛の座像上
宮なるの像性信上人の像證智の像を奉安せり　抑當山は古へ
高龍山報恩寺と号し性信上人教導の霊場なり即江府浅
草の報恩寺の舊地なり　什宝
又は親鸞聖人御真蹟石刻六字名号上宮なるの古像は御
自作なり又性信上人自作の真像あり　飯沼天神の社より例年鯉魚を供ずる即此御像　其外
俵茶所の石像は弘法大師の作なり澄智比丘自作の像なる安置し
境内の外に不動山と云る山あり毘香稱磨が作の不動なるを奉安せり　此山又
へより開光寺これを領せり

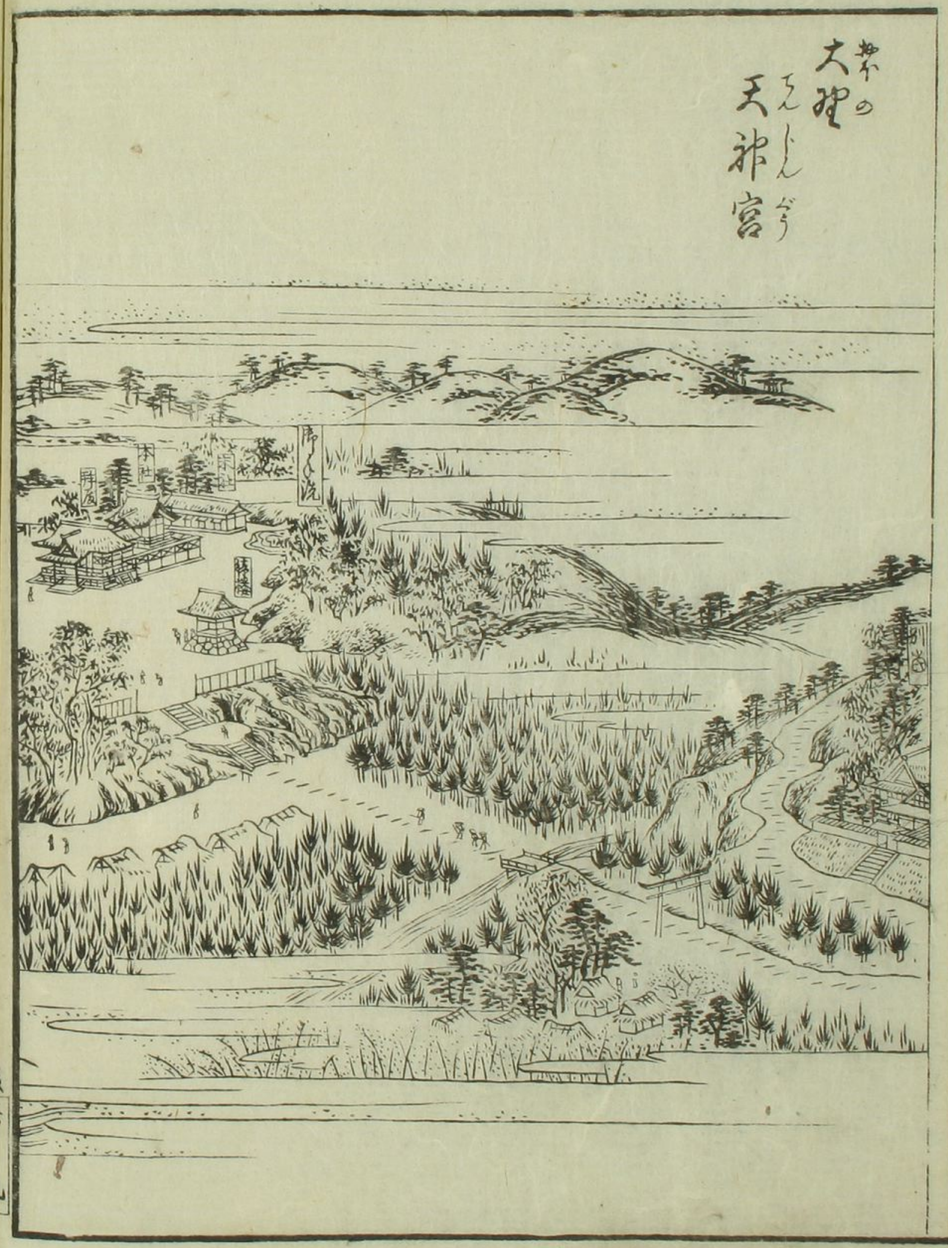


○左郎兵衛が宅跡光寺より額牛寺へ至る路路絡川のほとり花傳左郎兵衛
の宅あり聖人自ら彫せ給へる不動の尊像を傳来す代々大房赤弘
寺の門徒なりとぞ
○相馬の内狸跡い右花傳より西小絡郡岩井とかくとかくとかくとかく
○蛇婦かさよう塚い絡川の北とかく岡田郡羽生村あり即此絡川とかく流
まて夫子左つがるよ命を捨せ〜とぞ

大生天神 真言宗 日郡飯沼よあり 別当大生寺

天満宮性信上人よ帰依〜給へる江戸浅草穀恩寺の下り
委〜く記せり 天満宮本地ハ十一面観世音菩薩 ○祠の前よ龍燈の松ありよ天満宮
出現〜給ひ性信上人と拝〜給ひ〜礼拝扶い華表の前
よあり殊更仏法の威力神徳の炳焉たる感ぶべき此飯沼
の地なり穀恩寺の下よ記したく例年正月此池中よ鯉魚
と漁く性信上人の御像よ供るよ一年も闕ることなし
況よ近き享保の比とりや此池の北方よ七口の江と堀て池あ

阿弥陀
拝殿


奈の大神
天神宮

を分ち落〻耕作のたゆまざれば飯沼の水日毎日毎に
干潟となれて今は僅かなる細江の社所のみ流るゝ御手洗水と
い号せりされども流網を拖ろせば魚二尾の鯉魚と獲て年毎
の供物今に絶ることなしとぞ泝る世い流乗に及ぶとぞ宥
雖かりしたち〻なり

雁島の由来

むゝ高祖聖人此所に幽極とゝまり給ひ化益し給ひ
しに比〻も秋の最中限なき月を詠んとくるくるの
御舟まと俗に小舟に掉さし飯沼の池水に深び出給ひし
に實に今霄一倫にて清香いづまの霞に詠せ
し詩のさまもいくなんといと興ふく見へさせ給へ聖人の
御側に若姓房の物をゝるふ匂ひて宮ハこの明月に

池に嘯くぞ正面の平湖月山に満ちも謂つ度し唯をゝむ
らくは池中に小島のひとつあゝび孤に風色を増とぞきみ
と仰ぐ若姓房まてふ尤さふ〻へといらして其夜
も帰り給へ行くる十六夜の月もゆゑとりもいやま
まに思ひそへぞいざや今霄も月見んとて再び
池に乗り給へば不思議たるる夜霧まで濛沌たるし
廣沼の中に忽一つの小島の涌出て光なん蓬莱瀛洲の霊
島なるんとし御舟をの奇異の思ひ流るゝ
渡道周防とゝる者あり此島の涌出る所風雷てこを聖
人の高徳の天地の間に亮うるとそて家に飼養うる
雁の多一雙を携へく聖人に捧げ奉り霊島涌出の奇
瑞を賞ゝぬ時に聖人の一番に雁を涌出る島に放ち

雁海の図

西域記に見えたる雁塔は渠が德を旌せるに聖人の遺業宗風の海内にひろごるは紙漢王が一筆の星とうるはるる報きに片足なくん

さう法ひ且誓ひて曰く我教る宗法末世に盛んなりんは年毎の往来に此に来たりて拝んでうに供え給に
誠や聖人の妙智人に及せば邦人と化し禽獸に及せば
其命に随ふ六百餘歳の春秋を経たれども今に至て来る
雁も帰る雁も此浦の雁のとに宿るるるに沢一旬だうり
雁の立去に随ひ鶴も又水底に沉め奇なりとつも愚
昔往唐土廬山に住る僧に慧とつ大徳あり常に鶴を飼
て雲〳〵に遊ぶ慧死して後其忌日毎に彼鶴来りて
羽を翻嘴と叩き終日塚の前に泣るといひつ高徳
のいさかにそるれども彼の一旦の恩と感じて忌日を
弔ふとつ僅に鶴の一せのこなり是い大悲功業の妙智より
なるる和うれい歳万秋の末に至るまでよいみへに変るを

うに佛智方便の洪大なる仰ぐ迄に〳〵

或人雁鶴の説を疑ふに此地の古人に逢て問て云く雁鶴の深沈とるまで
るみぞ〳〵に出るよりもある所の鶴なる水源きに見い沈して見へを秋の
水竭て涸きぶり鶴の行くもあるべ〳〵昼夜鶴の深沈をるって
うくみの場所とる所なれば〳〵に云人の云く龍に成あり沢此鶴人を論
除すう性しかあるに成に出るに秋の沢もしかめて雁の
つる沢深萍りさのちくあ何まりうくに出るに沢て十寸斗に
ひ鶴ぞう絶に成に十寸斗の鶴といなるる成ぬ是ども元来云に
是ば私を疑ふ人の登るに曾てなり沢雁の宿るだうのちう
るみぞも深に成のあ何まり見て鶴に成て雁の立外後い何とるく
鶴と跡なくるなりむしい水に成るくに〳〵さるぞ近き沢いとも
きくありて大方水面と一つのもうに成るに成されども宿まる雁の深

大高山

飯泥のとに成ひる山なり石下
大房村余技村などに成ぬ

此山い大房村東弘寺の四地に高祖聖人の名だう植置

法人柳の花樹今に殊なり所に東弘寺と高柳山と称す

大高山願牛寺　西流　日岡倉持村にあり

當寺の縁起に曰く宗祖親鸞聖人建暦二年の春秋後國より信濃に帰り尚ゆきくて関の東に化を法りんとて下総國に来り法に統る尚國岡田の郡に稲葉保豫守勝重と云へる者蓮位房の從者にありしに聖人を清く奉せ懇にいたりすすめ給ひしかや一度聖人の教化を蒙り信心安得して御弟子となる光を一心房と名け法に此一心房幸に念佛弘通の為実に一宇を造立せんと願ひ法に聖人甚志を感じ法に道に坊舎を造り法に一の牛ありて此寺の造立をたすけ或い巨材を運び或い大石を負ひ人力を助けるが既に其用度調に及ぶ聖人

彼牛の石を負いうるを見法に傍なる沼に飛入て石ち一株の枯木となる化して化して[此枯木今尚ありて]近年大坂の[法]の住何某なる人之を見て[法]あり聖人雁[法]御旅覧の形うつしたれ[法]しそこれに拾さし[法]の印あり御舟[法]と[法]

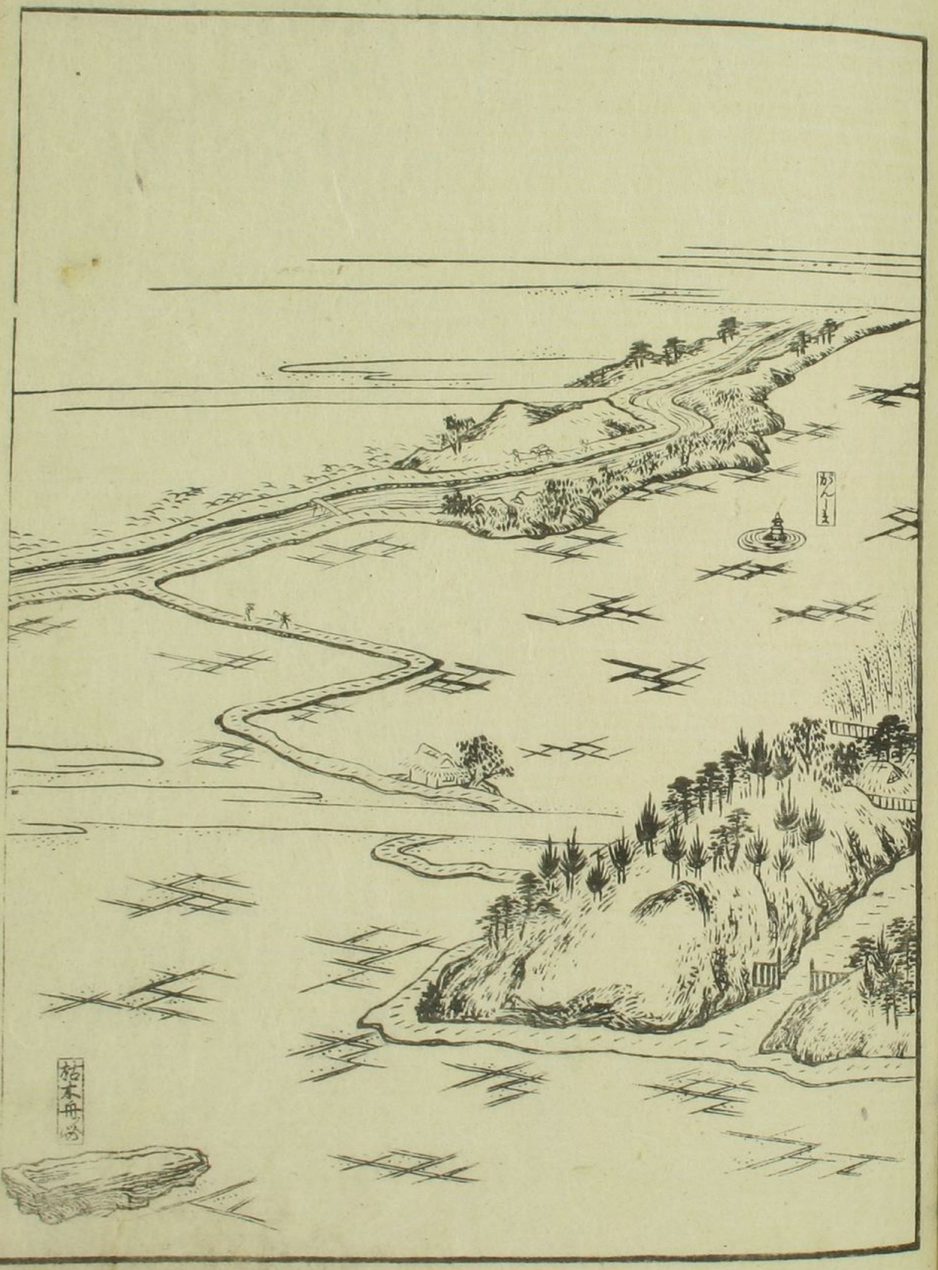
へしうば聖人奇異の思ひをなし法に寺院成の日に及んで扨こそ願牛寺とは号け法に常州稲田に移り法にかくて彼寺に一心房に附屬元文年中に再建して[法]と大る山

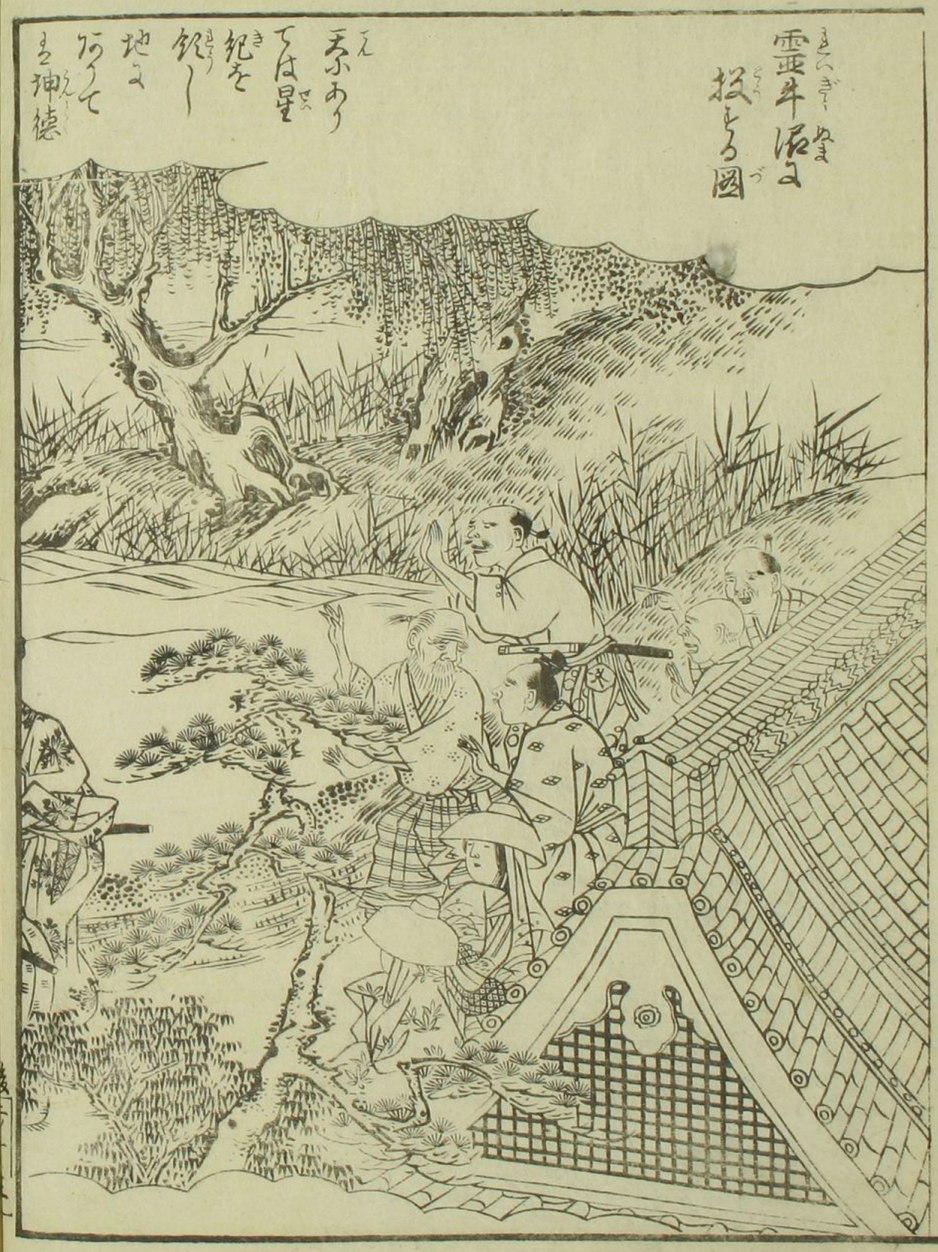
[旧跡]なり此地に仁治元年の比性信房の教[法]牛寺に号しこの[法]を来いづる[法]を[法]

高柳山東弘寺　東流　日岡大房村にあり

當寺に高祖聖人の御弟子なる二十四輩の第九飯沼善性御房の草創なり善性えぐめ周親と申せし聖人に値遇して法に尚國に移り聊かうつ國の大寺老田に郎親法の法に慈ぐ城中に逼迫なるぐ高祖聖人の興法利生に編き

大高山
願牛寺
雁島
牛木
本堂


かんしま
牛木村


霊牛流を
投る図
天あり
五は星
紀を
紀し
地を
なして
地徳

を表す
牛は霊る
るかくの
じし況や
吾邦を
より渠が
力とりく
伽藍と助け
るしの功この
霊跡を降くの
外尚多し清源ちこい
華髪をうげ国寺は
佛を法し天王ないて
祈る祈の勢よく佛国を
るるとばなりけを
四天王は食人を安とるふ
必ず牛壇を
築とや

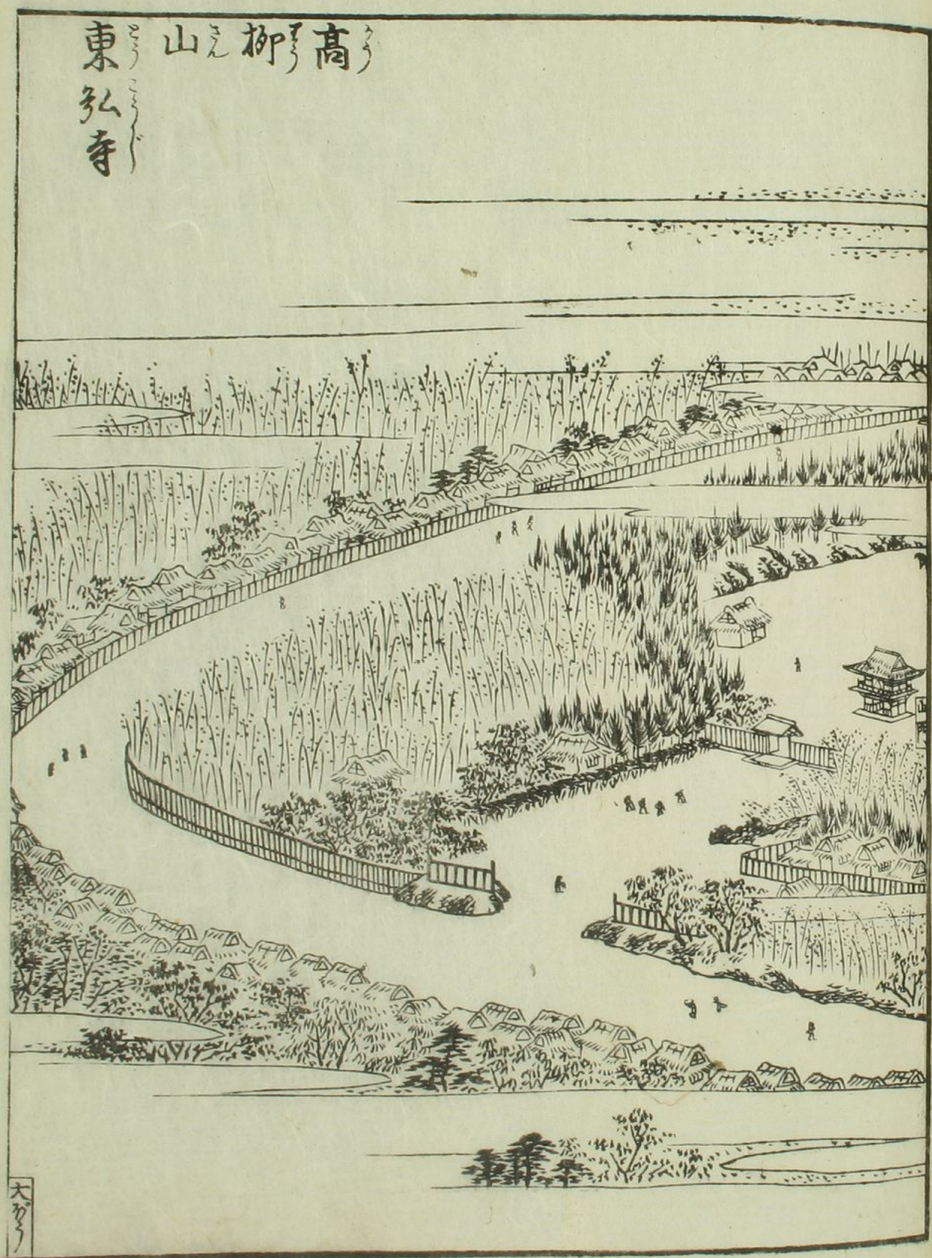
をたゝ人安即常州稲田の諸で聖人の遇〜聞法隨喜あ
まり覺の真宗の門徒となり給ふ世の抑ひて聖人法名成蓮
性と授け給ふ（蓮性御房のゆゑ〜くの和篇 ※後る田浄真寺の条下出）去りゝの大守親治なる者も
周親房を招請せ〜佛因よりて厚くも高祖聖人を倉
招村大る山の屈請〜奇り專絶念佛の行者となりて
良信と法号賜り蓮性房名と俗の妻二の御弟子と
（附の真蹟 此 元年なり）良信房が先祖を問ふの祖武天皇
十八世の孫ふ〜く代く豊田の城を三十三小屋の国みく
世う安へる武勇の武士なりきしが此時既の高祖聖人此
大高山の抑ひて化導し給ひ〜より周親房蓮性上人御四
師の後の退居せんゆをうきて即一宇の佛場を建立し真宗
の東方の弘通をるの意を以て東弘寺と号けらる爰の真永

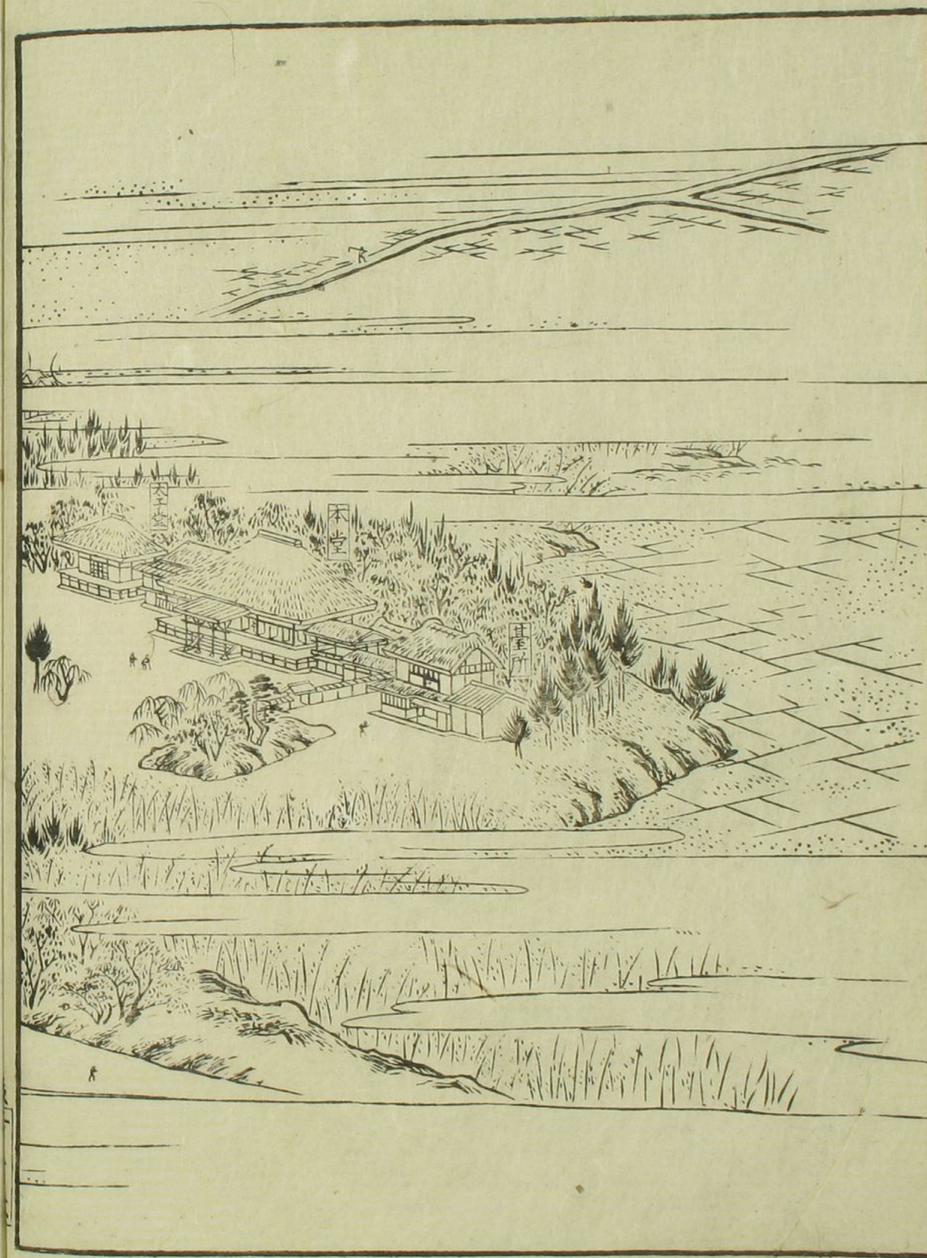
元年高祖御帰洛まし〜まるより稲田山浄真寺と蓮性上
人の寿年〜給ふが故の蓮性上人もこの東弘寺を建て良
信房の附屬せらる〜より良信房当寺の二世の住〜て蓮
性御房の寿像を彫刻〜敬恭崇信て專ら遺法と弘通
あり〜ぶ覺の正應二年七月廿五日法臘一百三歳ゑ〜く
當山の抑ひて大往生を遂給ひ其後年を經て寺を此地の
移もとゝ云（宗永の記事保の記もの蓮性房は豊田治親の法名ゆて建保六年大高山の聖人を屈請〜て御弟子〜なり当時既逝せりと記せ〜あるも今遺跡錄等てこれと異）○霊宝い弥陀佛の畫像（聖人御筆）金泥十字名号（月御筆）聖德太
子真影（月御筆左右の脇侍六人と別に御筆あり）い字名号（蓮如上人の御筆）佛舎利（三粒）御殊教（聖人天
後まで世（時の御不動なりしを蓮性上人御譲りとて所持せ給ふ）蓮性上人御譲（蓮性上人の御譲りとて所持せ給ふ）七雑毛（長さ七尺の毛を
のふりひあり一度毛と呼れが七雑と消と云 又名ふ七雑毛）
信州戸隠山（江州竹生島とも諸これ）天地開闢の時雨降〜数二粒名之

新悦山弘德寺 東流（月國岡田郡豊田の庄彩地村にあり）

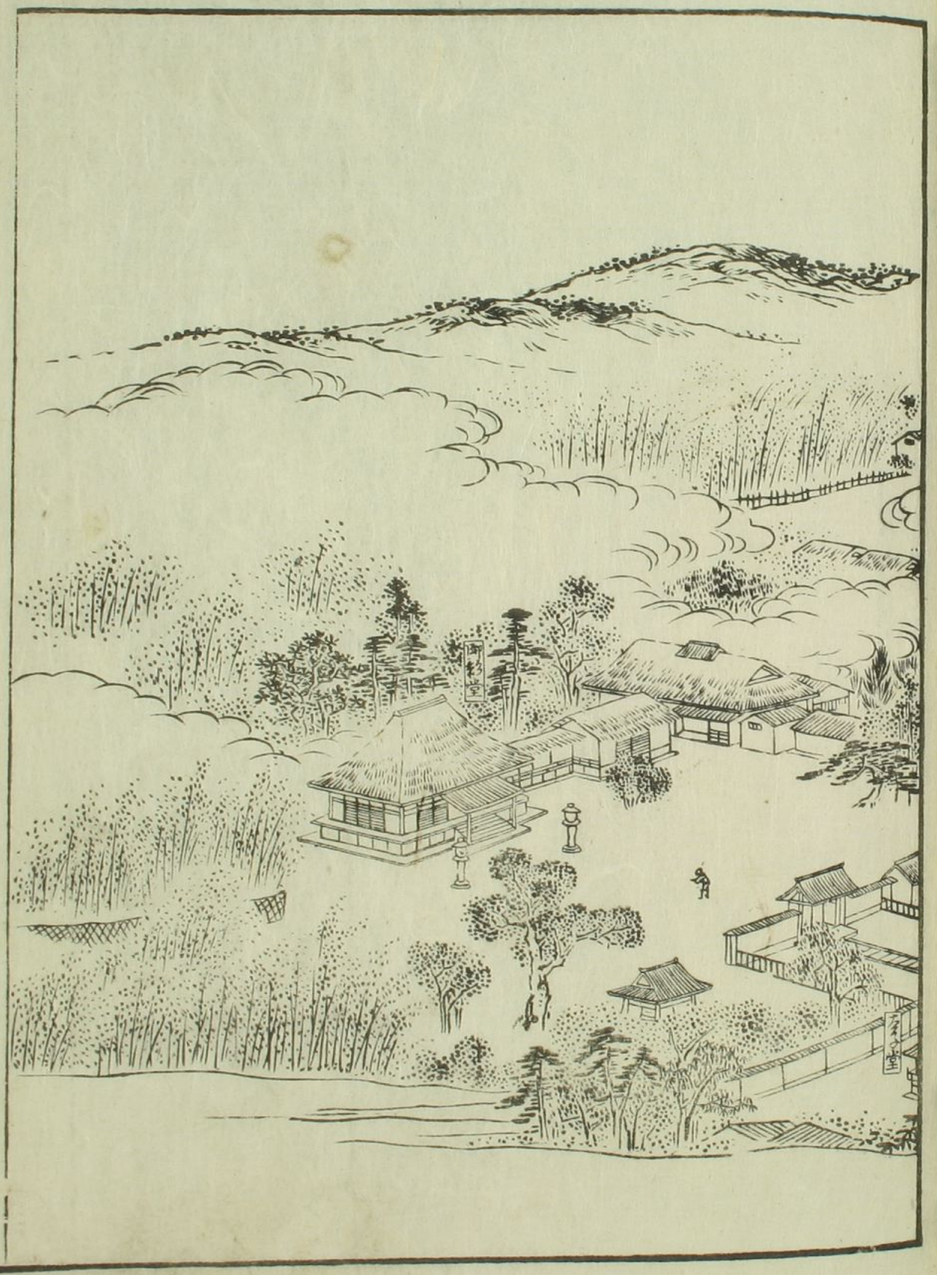
高柳山

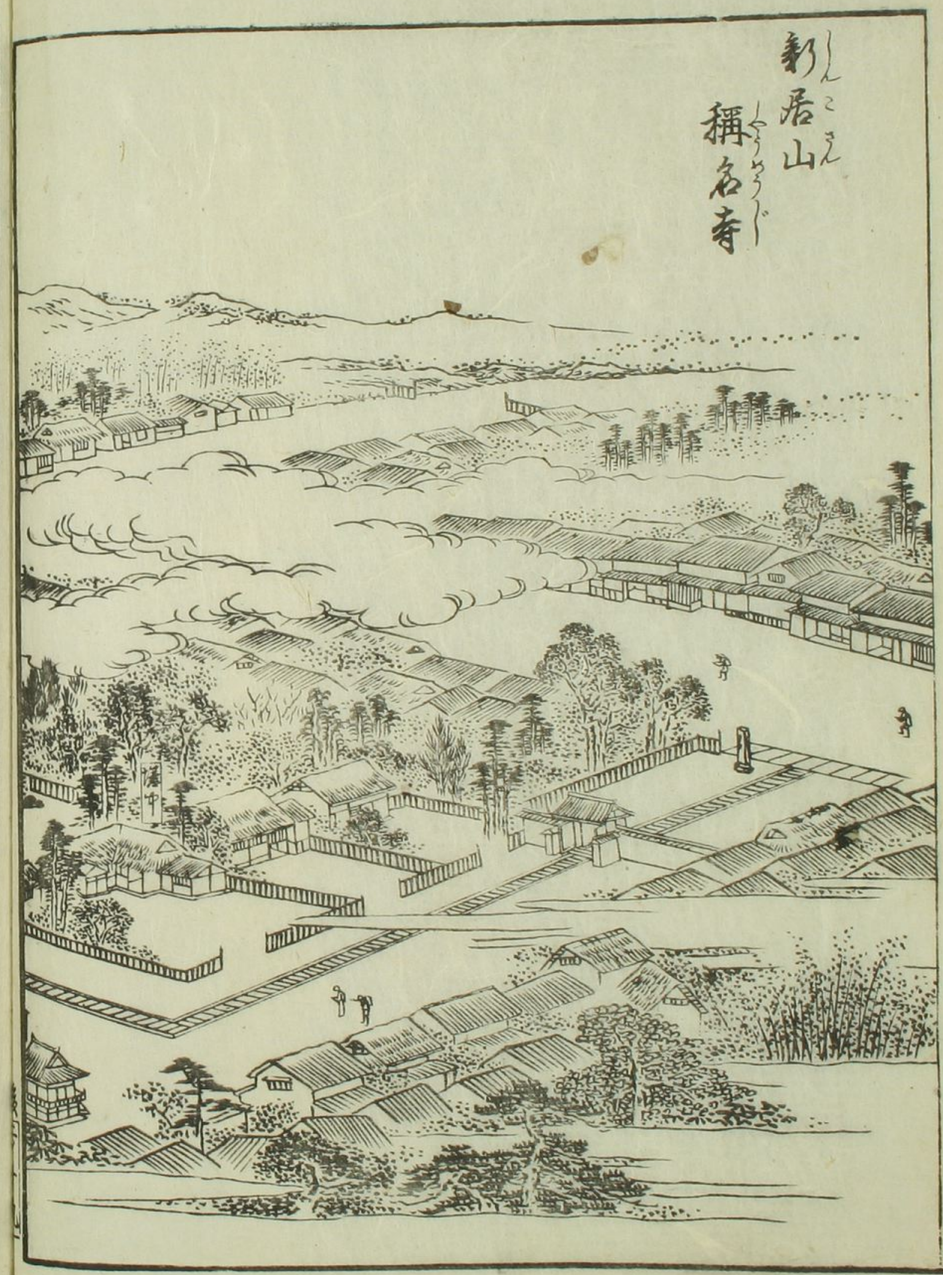
東弘寺





宗智院と号く高祖聖人の門徒二十四輩第五信楽御房の
遺跡なり寺家二坊あり
信楽房の俗姓を易るに平氏なり桓武天皇の後裔相馬
孫門の末孫相馬次郎師常 東鑑に曰元久二年十一月十五日相馬次郎師常率従七十余騎参掌不動揺安堵往生殺害
其経足念佛多者也稱 結縁緇素拳集拜之
聖人面授口訣の真義を受て即此地に一宇を造立し法臘を
さゝるに覺如上人来國往回し給ふ形しも信楽房未夜
在なりしかど上人即れを
給ふ其後第八世蓮如上人も又當坊に寄宿なし給ひ
いとも尊ひ霊場なり○什宝に阿弥陀如来畫像 高祖聖人御真筆
御和讃 淳古る僧正像末 三帖 日野真筆御袖表と名づく當寺中古宝上の第一宝物
ふきなるる巻物 接ぎたして巻物
ゆえなり周囲に焼痕あり 焼失せしに此御和讃もとより小史中にあり多れが




新居山
稱名寺

新居山稱名寺　西流　日國結城郡結城の城下にあり

當寺ハ関東七箇の大寺の法一にして六老僧の其一人二十四
世第二聖人の御直筆真佛御房の開基草創の舊跡也
真佛御房の事詳しくは下野國の国寺供寺の事に出す　○本堂本尊阿弥陀如来御長三尺余春日の作　堂聖徳太子御自他の三像御長三尺丸寸余類ハ仁和寺定助法親王の筆像世尊像いまの祖聖人常陸國藤沼郡抑玉日宮と申奉りて立南精舎の本尊被世親菩薩堅牢地神ハ藤沼郡抑玉日宮と申奉りて立南
蔵佛の結縁を尋き給ひんがため大慈大悲機見機應れば
巧をなして月輪入道兼實公の御息女玉日の御方と示現
し給ひ候今ハ高祖聖人ハ陸奥へ流し給ひ聖人配流の
御時ハ洛東幽窟の地ハ世代無比なる聖人遠暦の
比勅免を蒙り給ひ城後より常陸ハ濃り稲田ハ住し給ひ

真佛御房の擬城結城七郎朝光ハ玉日の御方の侍ハ
さまを深く欲き上洛の物ことれをそ〻まりて結城の東ハ
る玉岡といへる所に彩殿を志ひらひ労ハ傳き奉りせしが
聖人ハ御對面まことに小宏弘の叔源をとう給ひ
ハ聖人ハ真承の比帰洛し給へども玉日の御方ハ
尚も吾妻ハとどまり給ハ光明をうやし給ハ御歳
六十四にして建長六年九月廿八日彼玉岡ハ抑て天往生
給ふ霊告の文ハまうせ法名能莊嚴院女身禪尼と号し
ハ女人得脫の先達と仰ぐも抑ろ方なるべし
其後下野國沖村といへる所ハ真佛御房の門徒にて女身堂を
営み彼寿像を安置せ〻ば武州美の御告ありて結城の南
坊へいらせ給ひ又其後寛永の比准如上人関東法下向

の杉〻此霊像を拜〻法ひ自ら玉日宮とつふ三字と法深
筆ありて御厨子の額に掲〻ゆ法人

右の寺の傳記によりてこれを記す玉保の記は玉日の御方を藤
原若と都にまゐり早世し給ふとつたへ実に恰く世に怪り給ふの
ち〻て兵部卿三位敦の教卿の息女朝姫と改名し給ひ関東にくだ
あり〻て聖人に随侍し給ひ法名を寒心尼と称せしを孫名寺の傳
記には女身と号とるなりとつふ〻し又御法生い建長六年と記せしも
又古表の記は弘長三年の末御息女光信尼云の御方へ御入を
送り給ひ御往生い日年九月十八日とつたへ記き寺伝に玉日の御方い実に都そ
年歴九年のおくれありと雖ども宝永の記は玉日の御方い実に都そ
早世ありて別に三位敦の卿の息女朝姫とつふ御方関東にくだり給ひ聖人に給
仕し給ふとつたへ其外寺伝に此の修撰あるなりを雖ども遺跡稀附
翼に彼寺像の名を絶い年歴おくれて虚説を傳記せるよし雖ども
況も一ども密に見を棄てるふ其寺院の正邪はまだ〻〻論ぜ此六人の御方に達
の御姿を朝姫君と申せ〻い昨玉日の君の御名にて聖人に給ひ法
博り給ふの所に改名し給ひ聖人に随侍し給ひ
ちるの先徳の傳記既にあきらかり其上又古表の記の親鸞の聖人の御娘

光信尼御姿の悪信御房月論禅定尼御房の御姿玉日と申せ〻聖人
御入滅の杉〻の跡にて御入を送り奉り弘長三年末の記この御姿の御方へ彼霊
玉の記とまた法ひ御入を送り給ひ奉りをのせ〻り法の〻ち〻記一生之間法莊
厳の若年豊善薩の妻君なれい御法名の異記と御入家の年歴翻譯
せるの方なれてかりそのち〻彼霊像を以て伽他妻君とるい年号其外
事件の方へく其根本をとりしるるとつふ〻しかりとも管見の浅慮を
以て不可思議なる薩埵再来の霊像を拝をゞんや

真佛上人像

（真佛と号る田舎修寺に安置とる真佛と号る前真佛と号る紙記委く寄修の条下安
安置とる）

結城七郎源朝光の石塔あり其外霊宝国宝之

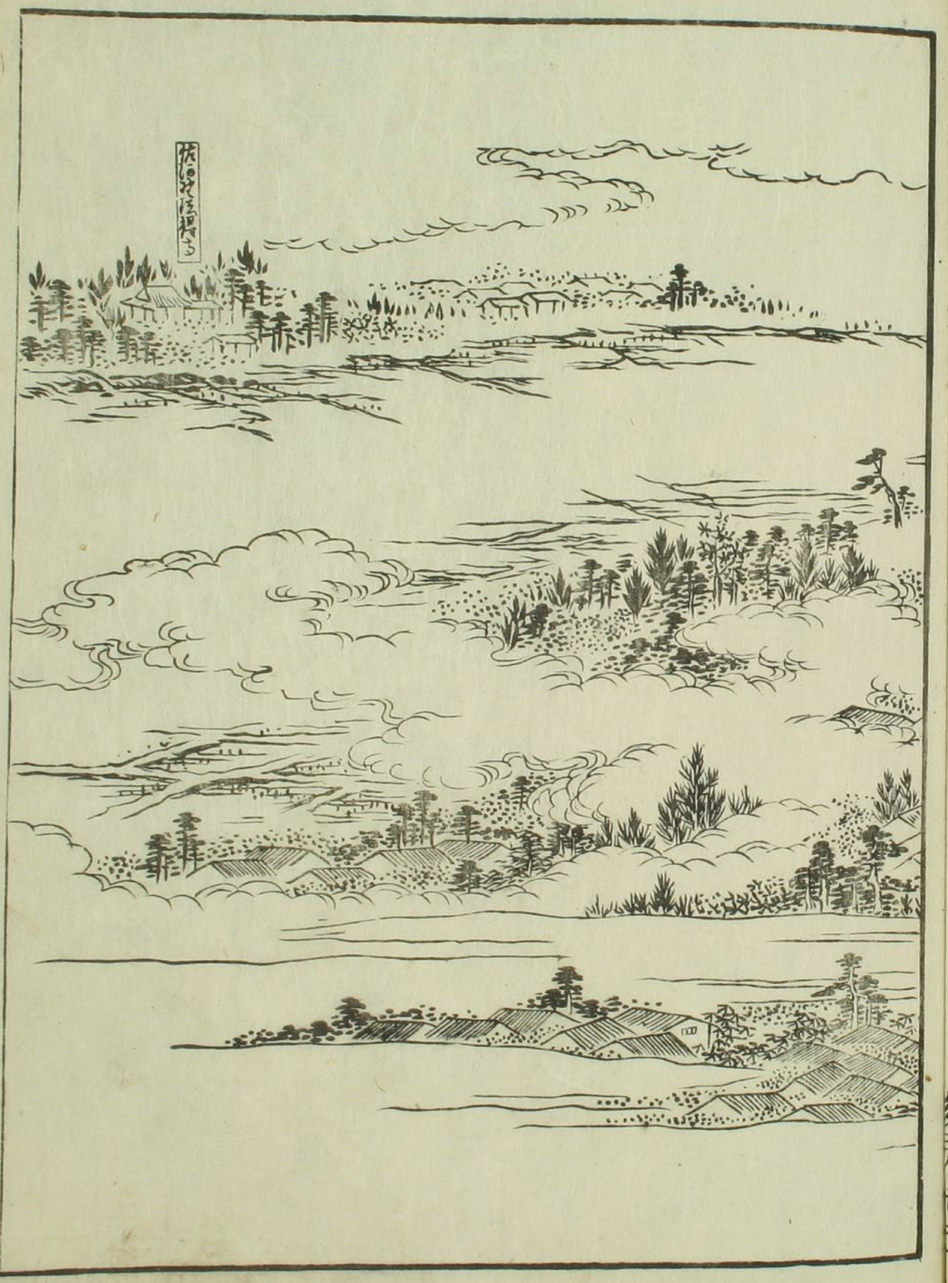
高栄山法得寺　西流

（下野国郡賀郡佐河郡村にあり級〻寺伝の巡路なる法寺号
杉樹を以て記とるとつふ〻も紙記什宝名い國司けの例によりて
本国寺の案内に出と）

野田院宗願寺　西流

（下総国葛飾郡古河にあり）

當院い高祖聖人御直筆阿弥陀田西念御房の遺跡にして二十四
輩第七番に屬し往昔西念房武州秩田に御住して一宇を造立



古河御城
宗願寺
法得寺

せ〜ようの地田の御房を建立なり齒寺い慶長年中の
建立とぞ　西念御房の俗姓傳記なる和篇信州布野長命寺の末寺より出せり西念御房の遺法しらみい信州布野長命寺流下総遍田村西念寺末流江州八幡要乃寺末寺齒寺と合せ　○什宝高祖聖人に十五歳御木像　聖人御直作御附屬の木像なり
末寺なるべしにケ寺也
因幡云円正浄因寺末流古河より移郡の間より水海村正覚寺末流ともにる祖
聖人御由緒の地なりと云

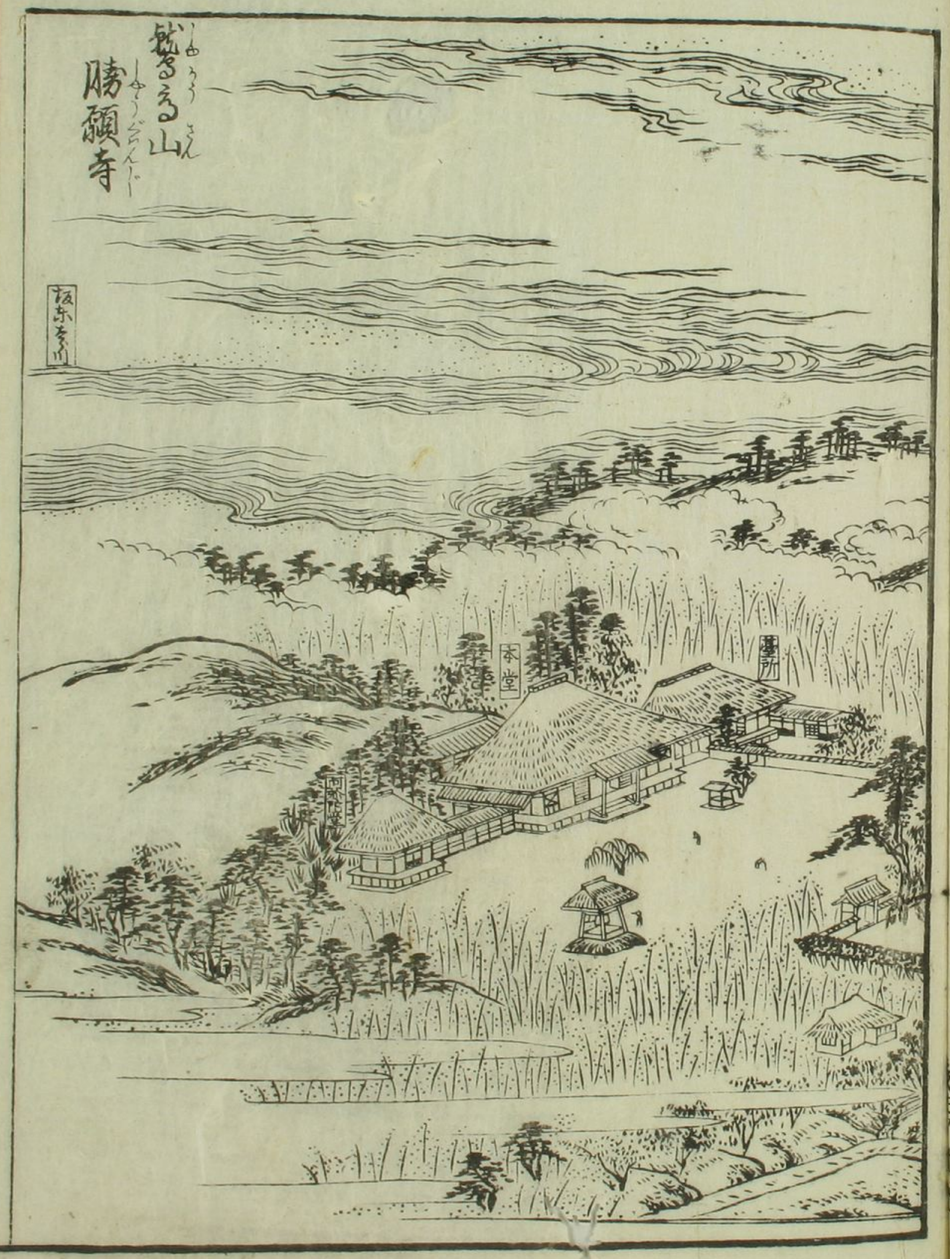
鷲の高山勝願寺　本流　日郡孫郡村にあり

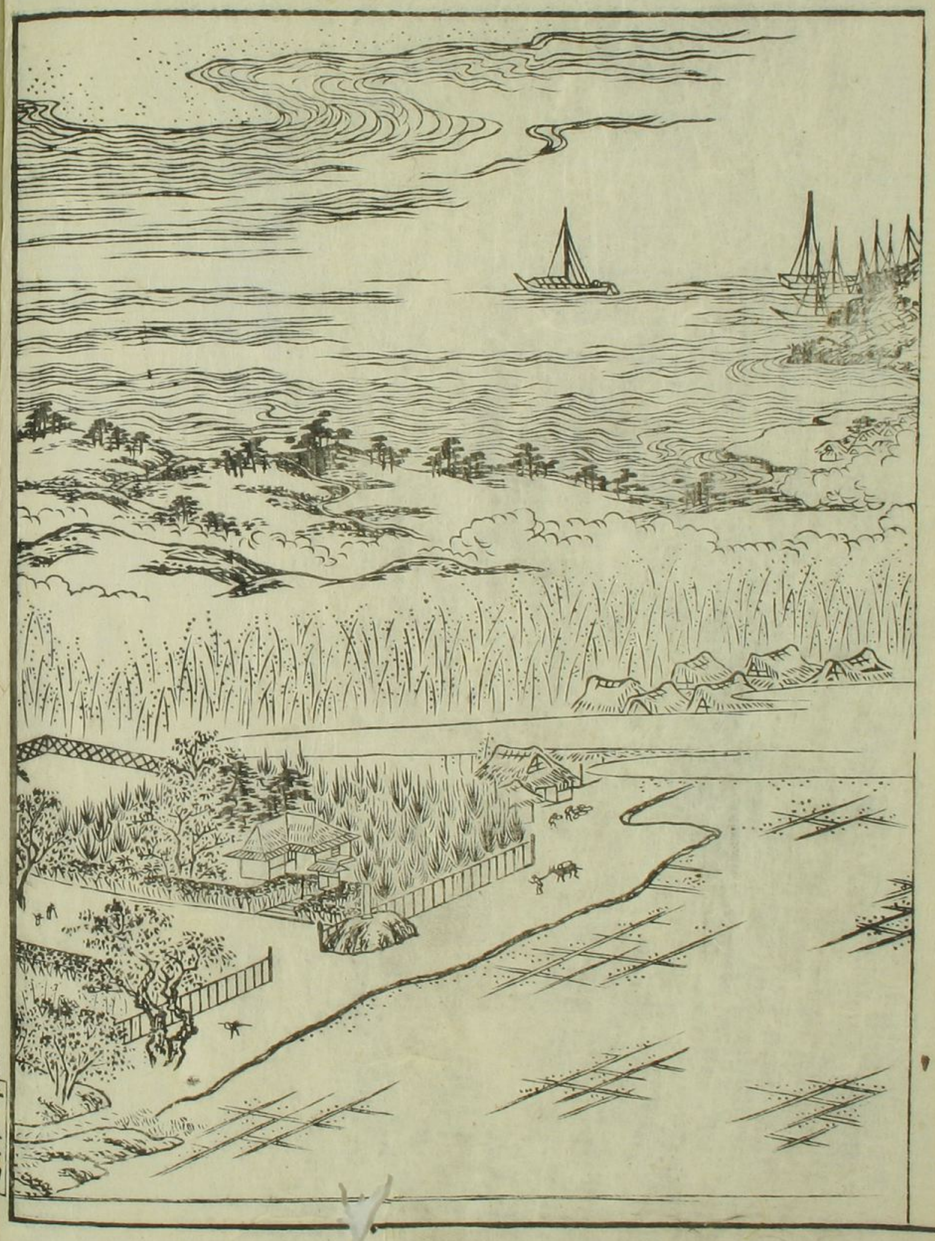
順性院と号し関東七箇霊寺の其一なり高祖聖人上足の
門弟飯沼善性御房剃髪の芳跡なり　善性房の俗姓を見しくも日國東弘寺の末下に出せり
本堂九間に面する阿弥陀佛　聖徳太子御直作　坊舎三區あり
開基善性上人初め大高山東弘寺を草創あり後又當寺を
造立〜〜く明性房を附屬し　明性房い真佛上人の門弟也　自ら稲田浄真寺
へ移住あり〜〜ご浄光寺　兵火のためを回禄せ〜〜ご再び

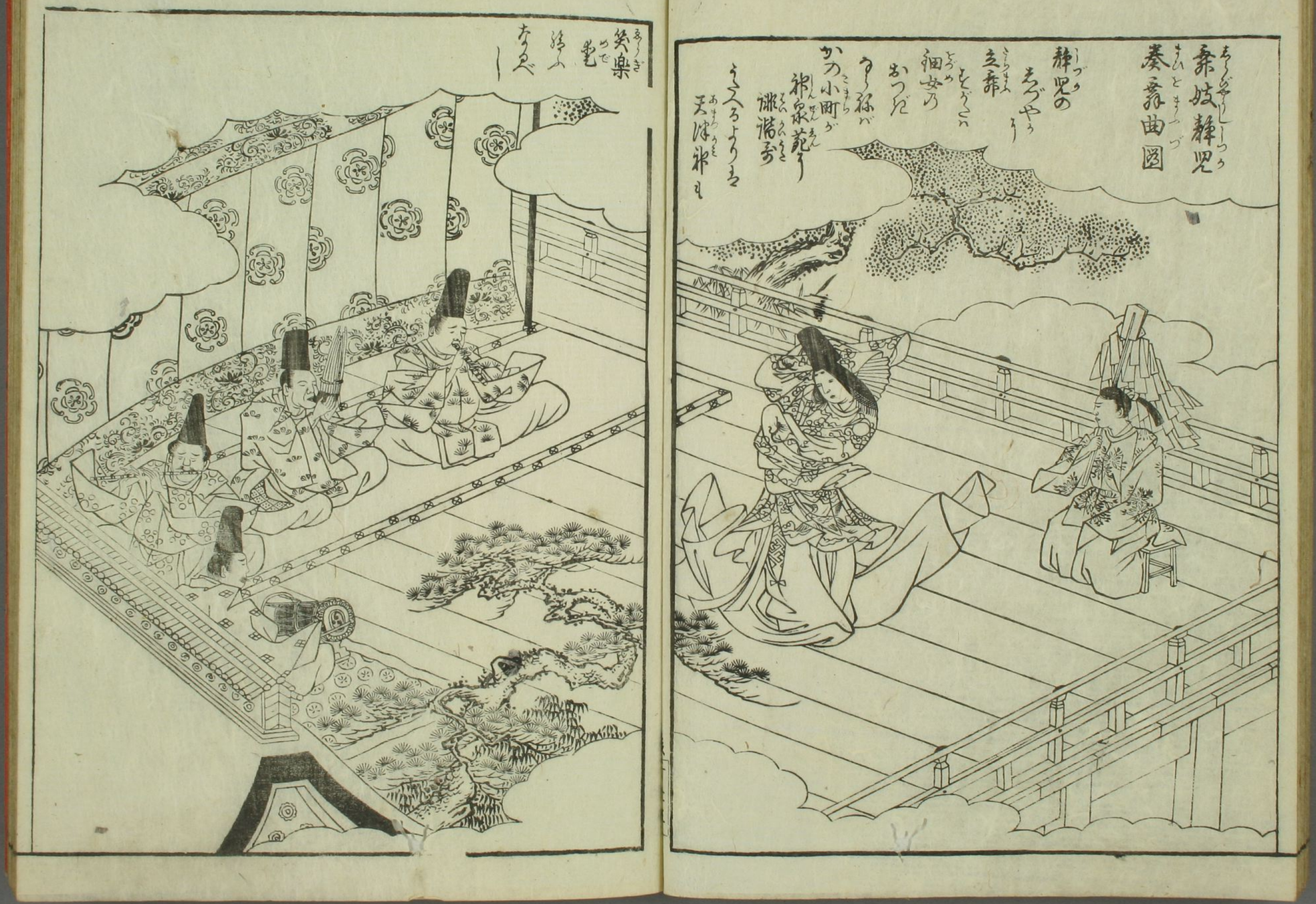
齒寺を引移し然る後ち信州長沼を堂宇を再建し後祖後
高田を移住せり即　歌吾山浄真寺これなり齒寺の相承
を開山善性御房二世明性房三世順性房　順性房い順信御房の真弟なりて鳥抵元寺を建る
佛図再興〜三世の寺勢〜〜て齒寺の中興なり
順性寺の後祖後を田　元かく代〜〜相續せり　に世善忠五世如慶六世教
白の御願〜〜あり其餘宝物これを略と
坂東二郎川の別名にて坂東第一の大河なれば古人字にてかくい
ふなり水源い上野國沼田より出下野武蔵下総三國の流流相合〜て
隅田川なる門て海なへ
高柳山光了寺　本流　日郡中田にあり

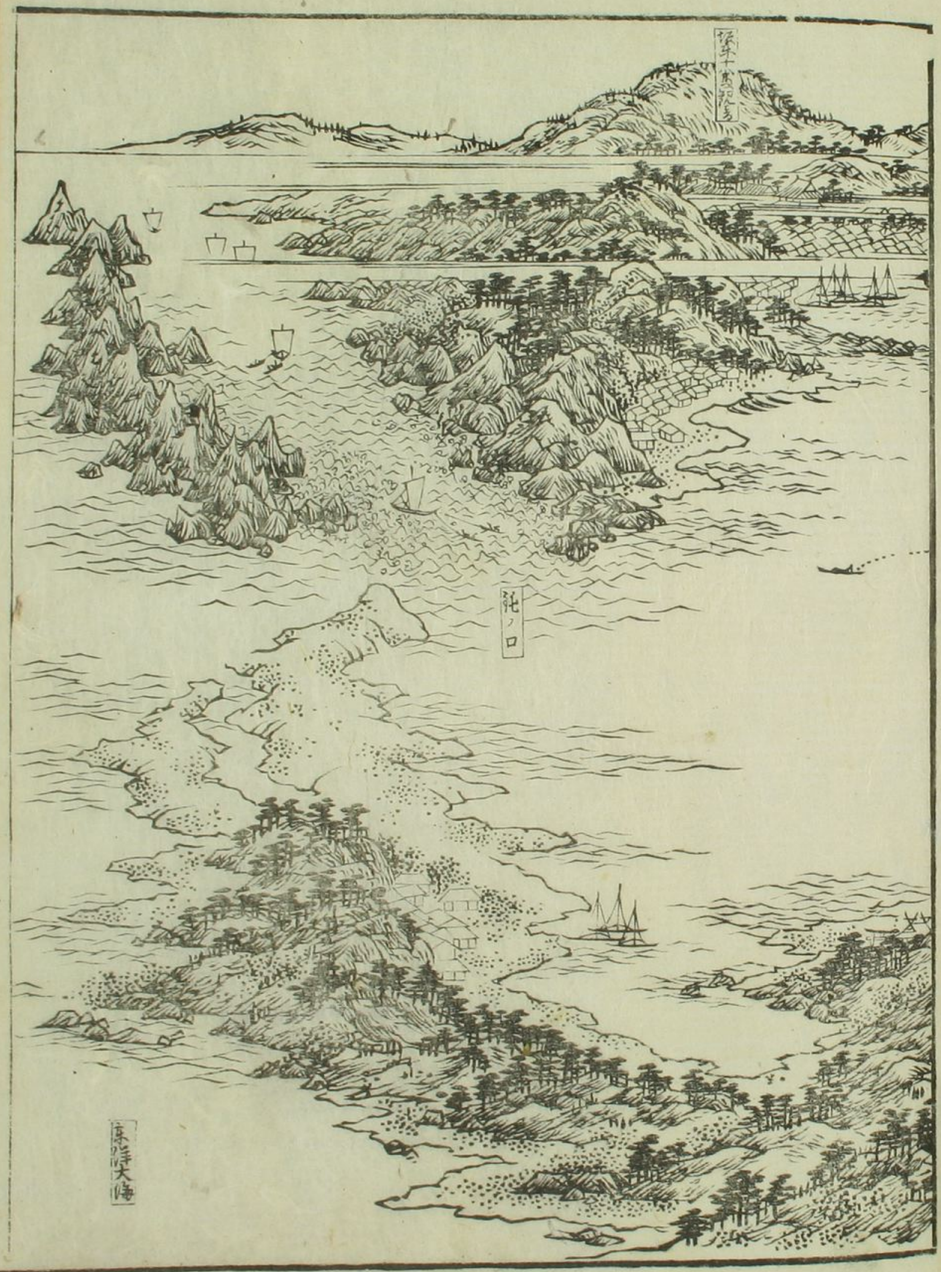
當寺四天台宗なる武州なる柳の郷なる在てる柳寺と号せ〜が
往昔建保の比高祖聖人御経田の御齒寺なへ御あり〜〜なる
寺勢真悦法師聖人の化益を蒙り開法踊躍のあまり御弟

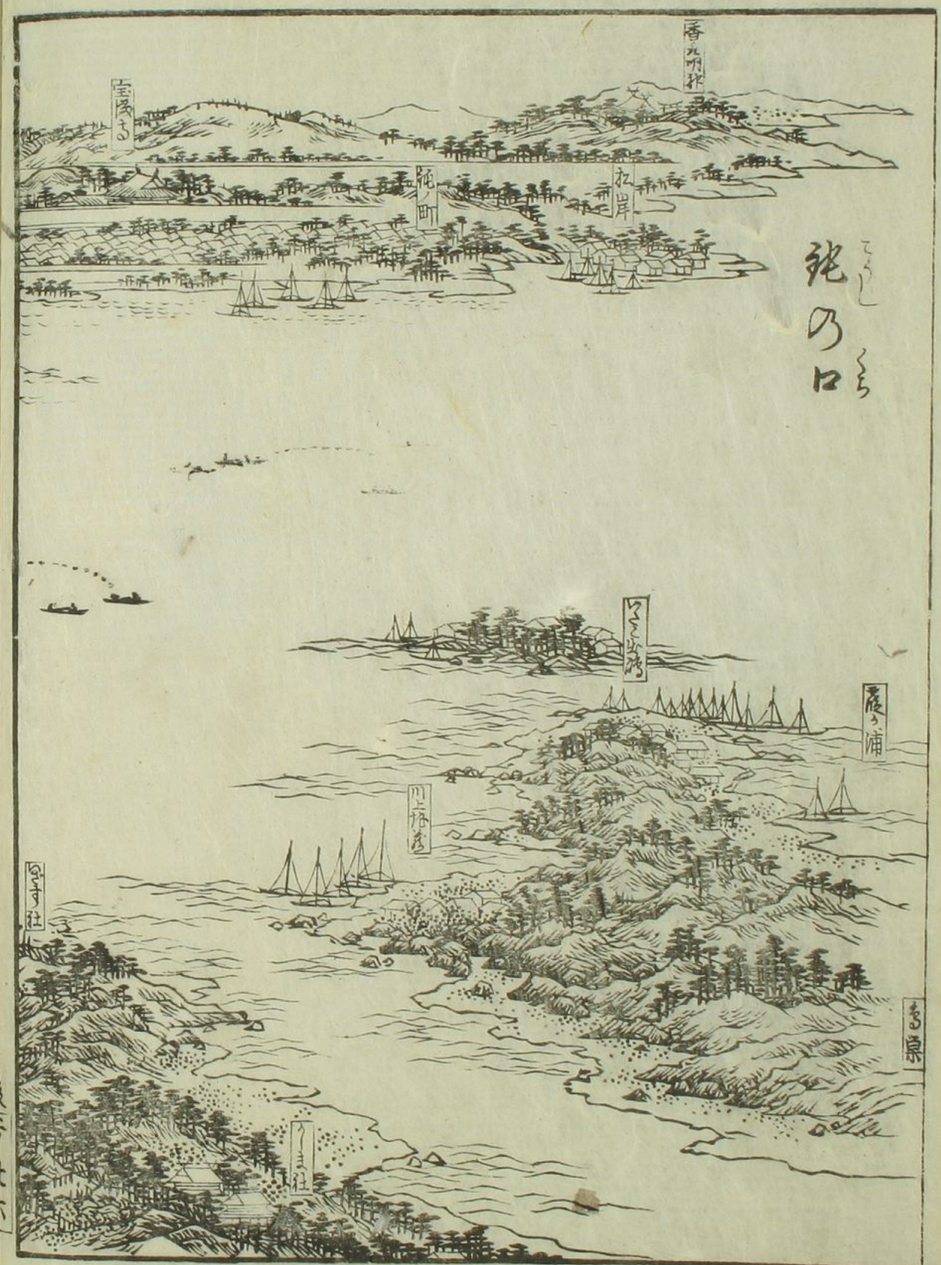
鷲ゑる山
勝願寺






奏妓静児
奏舞曲図
静児の
そぐやう
之舞
とぐくい
細女の
おつだ
う孫が
かの小町が
神泉苑う
謡諸子
うえろうろう
天満神も
笑楽
笛
鼓
拍子
たなべ

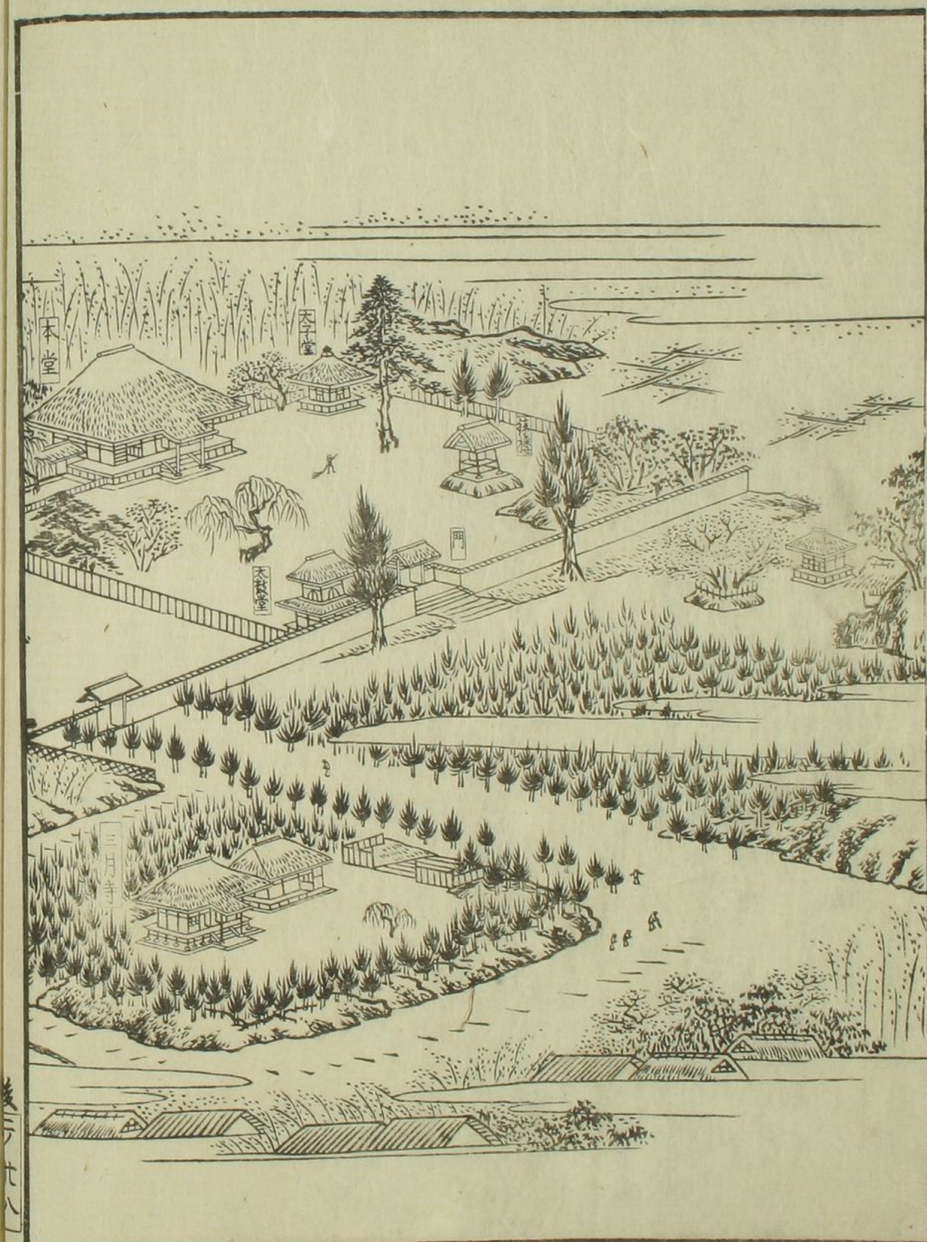

純ノ口


純の口
純町
履ノ浦

るしるしを改め法名を改めて西願と呼称し此時より
号も光了寺と改む第五世感悅の時より門さく寺を栗橋
へ移し第六世悅信の代より此地へ移住せり○宝物上宮
太子尊像　弘法大師作　静女羽衣　此衣は往昔後鳥羽院の
御時天下旱し雨ごひの為百人の白拍子を召して舞をもいしめ給ひしに十九人まで
次々なんて奏しかど遂に其験なしも見えざりしが最後の遊女白菊が女静児白雪の歌をうたい愛
常衣の曲をうたひ昊天俯受まして忽ち晴雲霞い来りて甚雨を降くなりしかば
帝感感のあまり御衣を与へて自らめげけ給ひしこれを此寺へ移し寺号を羽衣と
甚古きを尊びて御代々宝物の内に蔵せり　静児の書状　静児の書状は
藤原定家卿の西藤児の山地の書しの書状なり　静児の書状は
此遠く迎へ入むとの御書なりとあり　寺法橋多
○御堂宝満寺　巡流　桃源の漢詩あり巡拝の常州鹿島の町大船津より船にて行方
なるべし　○本堂十三間に西本願寺の阿弥陀如来　御首は弘法大師の作　御
持仏の祖聖人の御作なり　堂内もとべて麗く光る荘厳なり
○香取大明神　祭神は香取の御神　齋主命又は経津主命なり常
州鹿島明神と同じく聖師まして共に葬祭の中津国を治めたまへり
常陸国香取郡揖取の地なり　揖取の海名
よりて揖取と称す常州鹿島より船路にて宝満寺へ往返の時巡路なり
○常陸国の名所にあるうて小松ヶ原の浦と云へる所あり其名所の海浜をとべて鹿島
の浦と云へる続後撰集の道澄の歌
明鹿の浦なるの波の折つけて見せもし人の恋しきやなそ
○まの入江は鹿島の近し　鹿島の歌の絶橋をよくあいせり
鹿島や若のまくれ絶橋をよくあいせり
○明まるの池ろまるの堤なるど常陸国の歌名所なれども跡ふりて其所
もさだかならざる所なり載集肥後の歌
池もふり堤崩れてくるあるにしもうまされるのいさらん
其外美乳山潮田川なと武蔵国なるなれども日名異なれども武蔵の古い人
のなる隈多きれい都て人の題ひをすとるをなて見と墨沢
○常陸国の名産。葛西若即浅草。紬結城紬なり。門張常陸国中山。三度栗
常陸国
古来風土記の流信ど雖　知ひさ知ひさ
とる人国うてかるなる心なり知ひさ
外なるなるの名之陸奥小山出張さる国なれども
の極なれば岩城の三郡なる後平むしなる
西本山光明寺　東流　常陸国真壁郡下妻あり
高月院と号く高祖聖人直筆関東六老僧の内明空御房の開

西本山光明寺

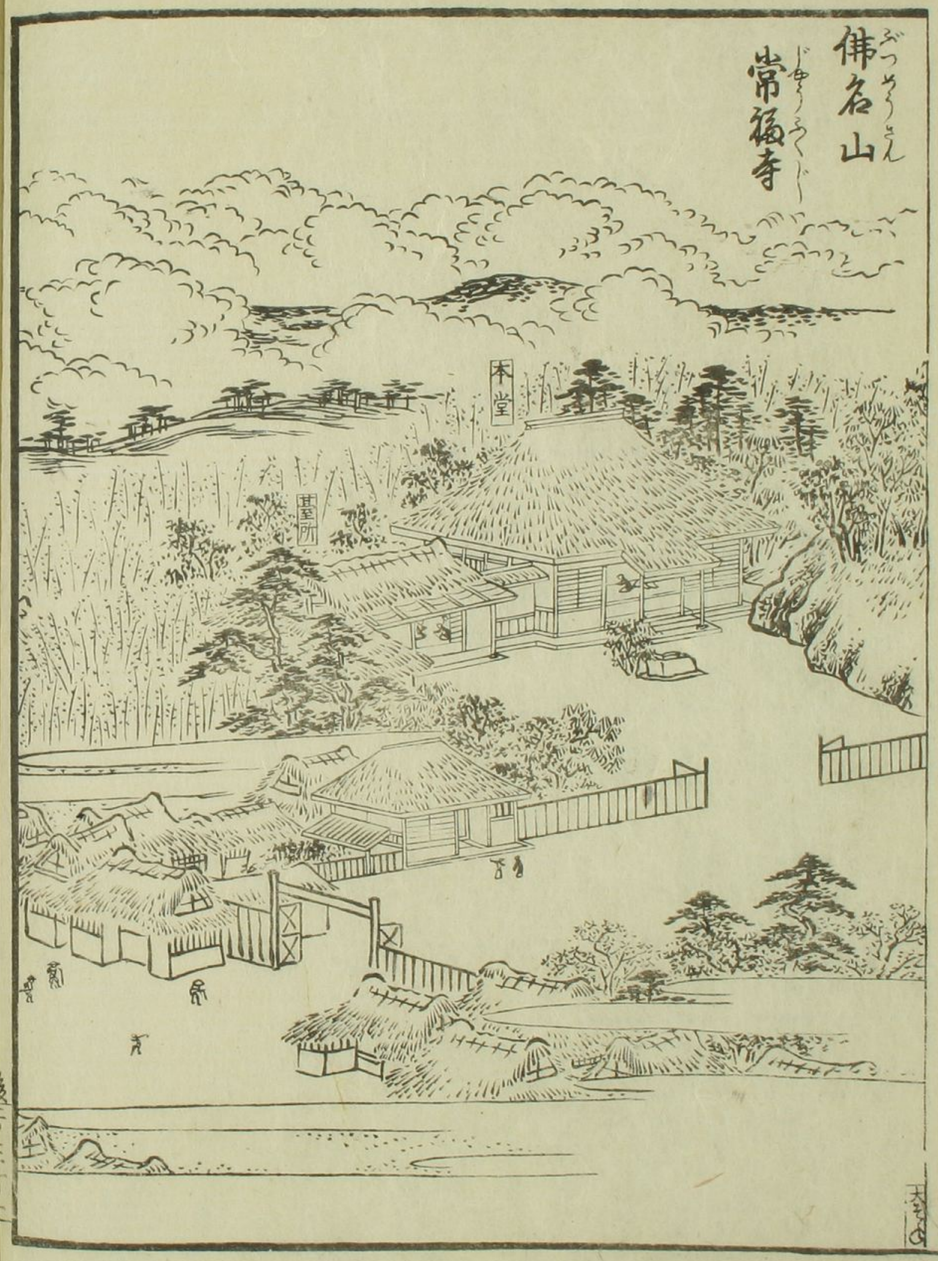
小海山三月寺



基うて聖人法筵を設け給ひしに不叶霊場なり○本堂九間に面
本尊阿弥陀如来（安阿弥の作）　開基堂（明空法師の像と安置）　坊舎二區あり
抑明空房の俗姓を易る小槙武天皇の後裔三浦平太郎為継奥州武
征伐の時大手勢功ある（奥州武御家御）の息三浦庄司義継の嫡男同大介義明（治承二年八月廿七日平氏世を亡ぼし長寿
の人なり）の子同次郎義澄（治承二年正月廿三日平氏滅年七十に）の男平六兵衛尉義村（後五位下駿河
守と称し武功あり嘉禎元年正月十日卒し十男あり嫡子若狭守後五位下駿河次郎
泰村二男小次郎兵衛尉朝村三男三浦三郎光村に男又太郎左衛門尉氏村五男に郎左衛
門尉家村六男五郎左衛門尉資村七男六郎左衛門尉長村八男
七郎左衛門尉重村九男八郎左衛門尉泰村十男平六義継名也）は九男駿河八郎左
衛門尉盛村なり延暦年中光明寺の軍家の臣近くして其家大き
繁栄なり殊に泰時の孫なり宝治元年霜の比嫡男若狭守泰村
謀反よりて一族滅亡せり此時盛村も奥州に在るゆ
これは主のすり世の様の心憂くして出家して
ありなるを小山判官長村ゆるす搦捕とゆ（東鑑に曰宝治元年十八月廿
日駿河八郎左衛門尉盛村

勢ありしに中古衰微すに及ひ遂に光明寺の境内稲荷に云
三月寺舊地（光明寺より三町丁彩地村へ移るなり）
往昔聖人三月寺を建立し四地より方三十間許に面に出堂を
中に聖人をつくり拝殿後に堂二宇あり（三月寺の拝殿）
佛名山常福寺（東流　日国彩浜郡大曽根村にあり）
玉川院と号し聖人の上足二十に寿筆十八八田入信房（恵信）
唯心の遺跡なり○本堂御本尊（安阿弥の作）
八田入信御房は中の山国那珂郡久慈の西八田郷の領
家なり八田五郎知朝と号し累世武勇の家として殊に知朝
当時に世ひろく其誉を隠なし知朝宿因の深厚なる
ゆ聊善提の道小志に移りて幸なりうる高祖聖人猶原

三ヶ川


佛名山
常福寺
本堂
室所

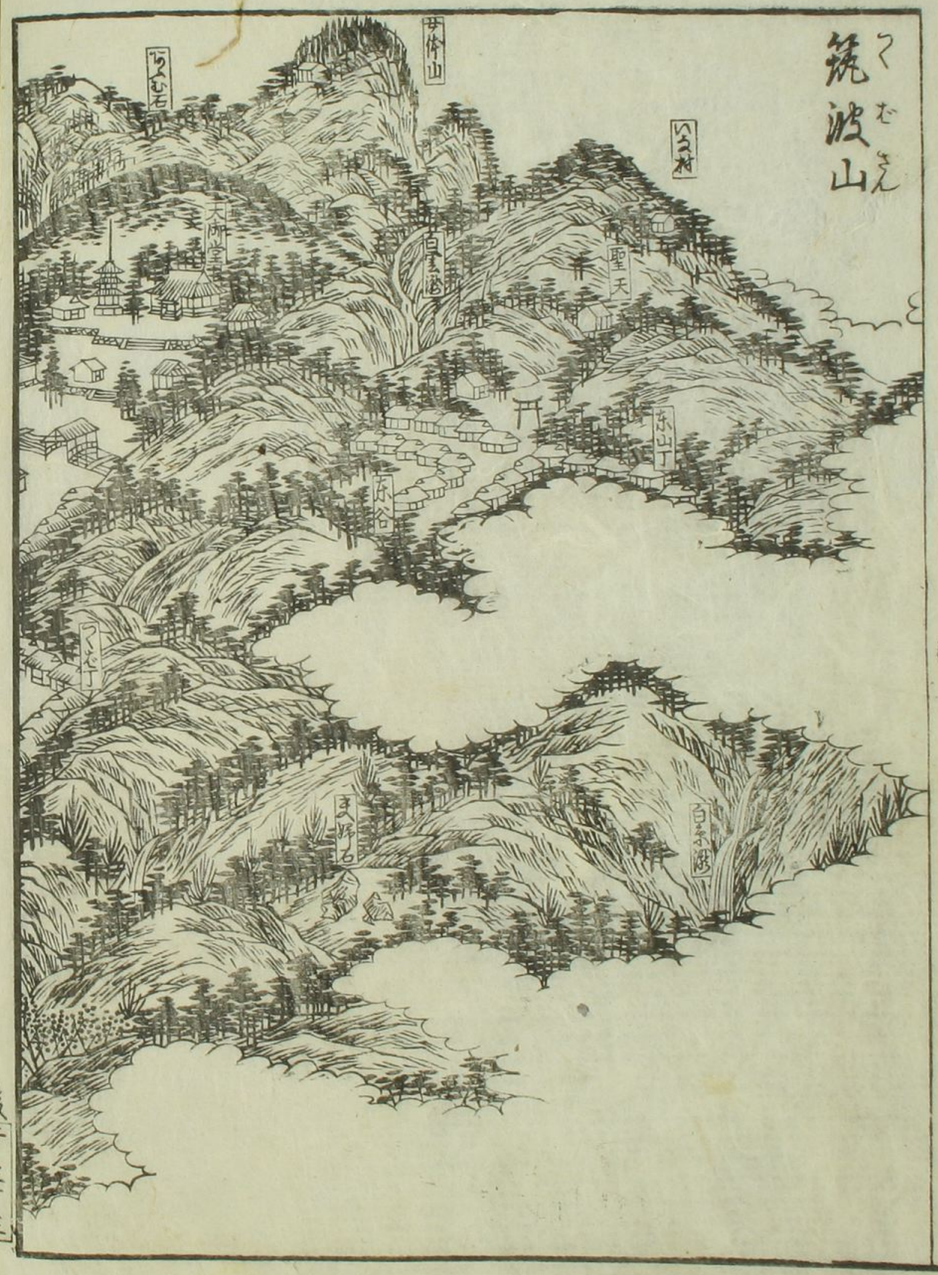
大門の郷御経回ましませしかバ庄に趣向て拜謁なし渇仰の思ひ深くして即出離の要路を問まゐらせしに聖人殊に専修念佛の奥秘を慇懃に授与し給ひしかバ知朝立所に聞法随喜して師資の約をなしけるぞ聖人即入信と法名を号け給ふかくて入信房ちかの屋形を廃毀し立ちに一宇の佛閣となし八田浄福寺とぞ号しける其後聖人御上洛の砌入信房御供とぞ慕ひ登りしが猶ゆゑ有て尾州日比野延善寺に於ひて聖人に値遇奉り給も嬰子の母を慕ふるがごとく歎く事限りなかりしに卒に病痾に罹り終に彼寺に於ひて往生を遂ぐりし時に嘉禎元年乙未三月廿八日なれバ延善寺の寺務入信房の孝信を哀て死後に聖人に謁せし奇特を感嘆し即其木像を彫刻し永く寺中に安置せり○霊宝念佛往生三國傳来師資相承御影 此御影ハ世に類ひなき霊宝なり聖人御真筆を以て中央には六字名号上には善導源信法然三師の釈文を摸写し下には法然上人及び鸞聖人の御影を畫図し給ふ其後如信上人是を譲られ給ひ是もいづこの教に預んとて其下に自ら御影を書き給ひしに又其後覚如上人我も此例を外さじとて如信上人の御影に對して自ら御影を畫きたまひけり是によつて師資相承の御影とは申せり 書壇の花瓶 ○玉川石 此二品ハ聖人御所持にて入信房へ賜ハる所なり其の外これを略す

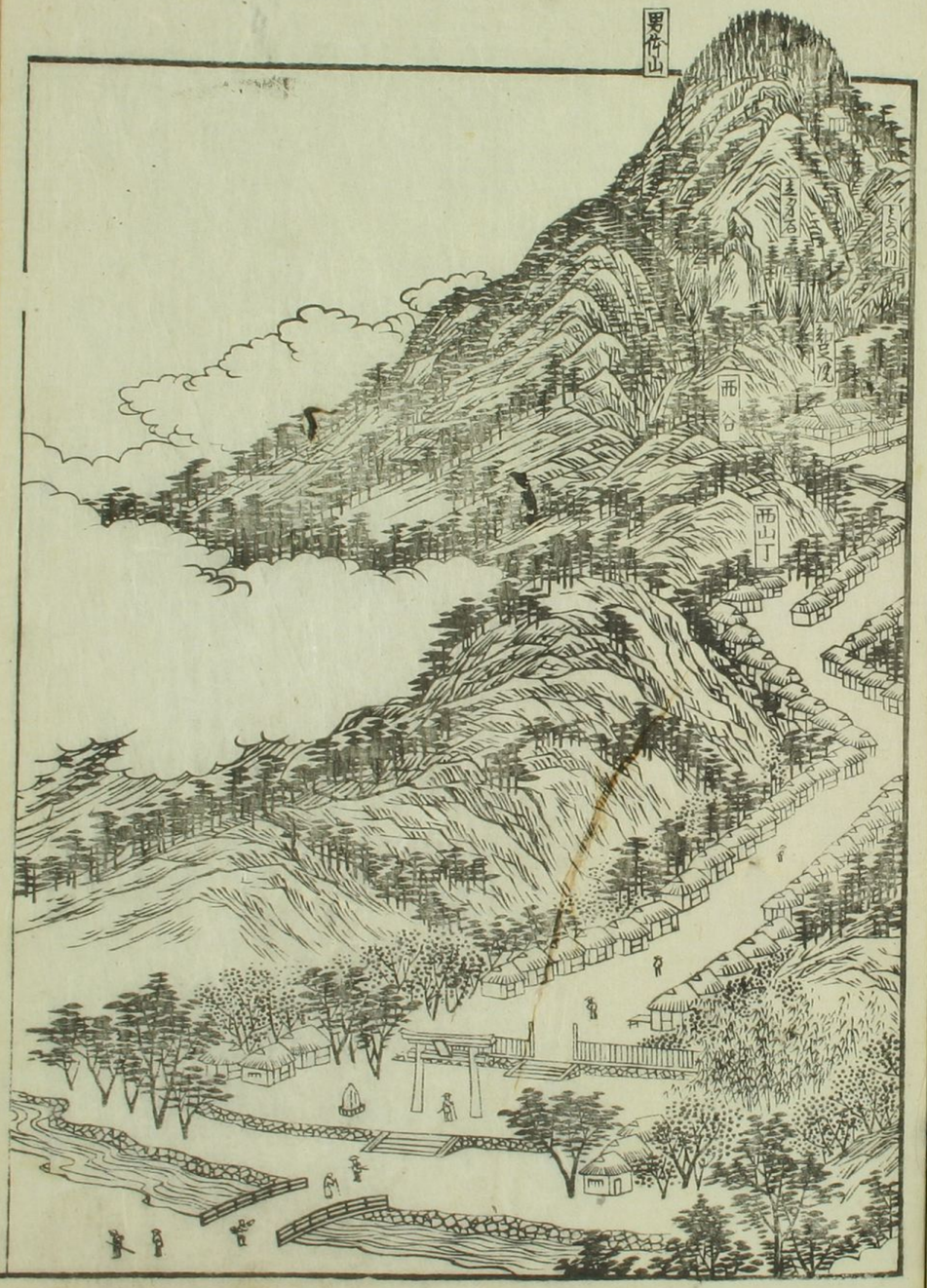
筑波山大御堂

同國新治郡筑波山筑波町にあり

中禅寺と号し延暦元年徳一大士 或日徳一大士ハ傳教大師の弟子なりと又云法相宗の碩学徳溢大士之と の開基にて台宗なりしが弘仁年中弘法大師結界し給ひ 未だ何れとも定めず是ハ大師登山の折から權現の現宝より御手づから千手大悲の尊像を彫刻し給ふとぞ今本堂の安置する所の霊像これなり坂東三十三所の一にして第二十五番の札所なり本堂ハ南面にして十間四方上に金字の額を掲ぐ ありてより以来密宗と成りて當院ハ宗祖鸞聖人御真筆十字名号を傳ませり昔祖聖人當國稲田に御滞留の折から筑波權現夢中に示現し給ひて御志ありしかバ此に於ゐて聖人御登山ましませしに

筑波山（つくばさん）





西行上人与
女体權現双
鄙曲話

西上人の山中を
まう女を智し
き拾遺集に
崇徳が歌
とて
あもうく
知もうよ
什殘
いうぞう
何ま
のの
なまめ

秉燭翁仏行歌
若月本作

權現既よりまた復まぐり下山あり てまるぐ社来儀を勞ひ
給へ 山のまぎれに細流あり 橋を渡せり 迎橋 [illegible] 即今合の石なり [illegible] 登山の本
路 此石より登ること男神山の谷 聖人御腰掛 [illegible] 聖人教らせ給ひしる岩屋あり 又女体山 [illegible]
聖人接現と同者あり 岩屋あり とべて山上に宮宛 [illegible] 社の神をまつる 此ところ
權現の御願堂よりまた筆を深給へ不とそ其外什物聖
人權現と唱へ給ひ始めたびより膳を通じ給へ二首の
御歌多あり 二首ともに聖人御筆

○物成郷が曰はくいにしへ
常盤の縁によりて
りて日高見の訛合せるなり ひさうこれかこの反切きき泥ーてち
[illegible] 或説に東海岸より逆流ーて此山の榊を及びーのび
元来高山うしいにもとふせぐる始も堤防を似ざりしく山と筑波と
号くしまり 抑當山の祭まる和の御神二体西の峯に鎮坐ーー給へ
と体妹諸尊と 男体権現と稱て東の峯に鎮坐ーー給へと体妹
冊尊と 女体権現と稱て東と接る小天地開闢ーー附
紙二体の御神天祖の詔を奉ず高天原より 磯馴洲にあまくだ

り給ひて州國及び山海草木を養給ひしーに其始め東方震位
に向て此山を出し給へ故に長男山ともやせーなりひくて二神相
議ーー給へ 大八洲の國既に定まりいんぞ此國に定給るーーんやと
て幼日の神月の神蛭子の神素盞嗚尊この四の御神と生給へ日の御神
を稲村ヶ峯月の御神は安坐常の峯蛭子の御神は素盞嗚尊
尊は淡の峯に鎮坐ーー又母の二神と常に榊の巫女に移びなる
今は榊の六社これなり此を祭祀いよいよ尊ぶこの西山上
山下筑陽更代の式礼なりしかど中古流定まりて 月朔日十一月朔日
の両日に定まりーー榊なる第一の華表に天地開闢筑波神社とかける
金字の額をかくーー 濱に日本武の霊山ーーて殊に和光同塵の御愛
師なれば誰か緒縁を仰がざらん
たくぐひのこのもかのもとけいあまと若がうけるまに新い反

○尚山の南岳に月輪掌菓洞なる岩窟あり 先ところ八ち 往者開山徳一大士 初
て登山ーー霊窟と掘り巡らまーー 御天童のをーへより 神代老稚巻と云
金郎上人の神書を感得あり しかるに此書は即尚一山の奇石宝砂
孫本霊茗の数と具に記るせる書なりとぞ尚山今に蓄と生ける
筑家少ることを以て宝とせり
○霊窟とつへるい其源泉流へ通じて潮水を通出ることむうー

婆羅龍王西天修多羅院よりある石の三十三天及び諸佛を彫付
る靈種一口を當山に石明神へ献せんとて出現せり石之龍王の後
勅請して今の鎮守天女これなり靈種の龍神の献せりゆへや
芝を接附の海水漲まく民人の愁あれば今の山の麓聖天と
祭まる地より怪光をとゝかゝよ上件の始記いとへく社家の伝へとぞ

○當山連歌の授與とつかゆ日本紀より天宝元十年乃冬
日本武尊東夷を征し給へ衣比須とてく平げ日高見の國
より帰り給へ路常陸國と絶て甲斐國よりの酒居宮にて休
らひ給ひしより獨をとゝて所食と進る者あり附よ尊かたうとし
て侍臣に向て賞く理比麿利莵歌波鳩須擬氏伊歌夜加補津留
と侍臣あへて答るの歌に紀るよ波嬬とゝるもの之れよつて波
云く加加奈江天夜稜波古古乃夜比尓波登於加鳩とこれをよい
ち後世連歌のよつくおこる不なり

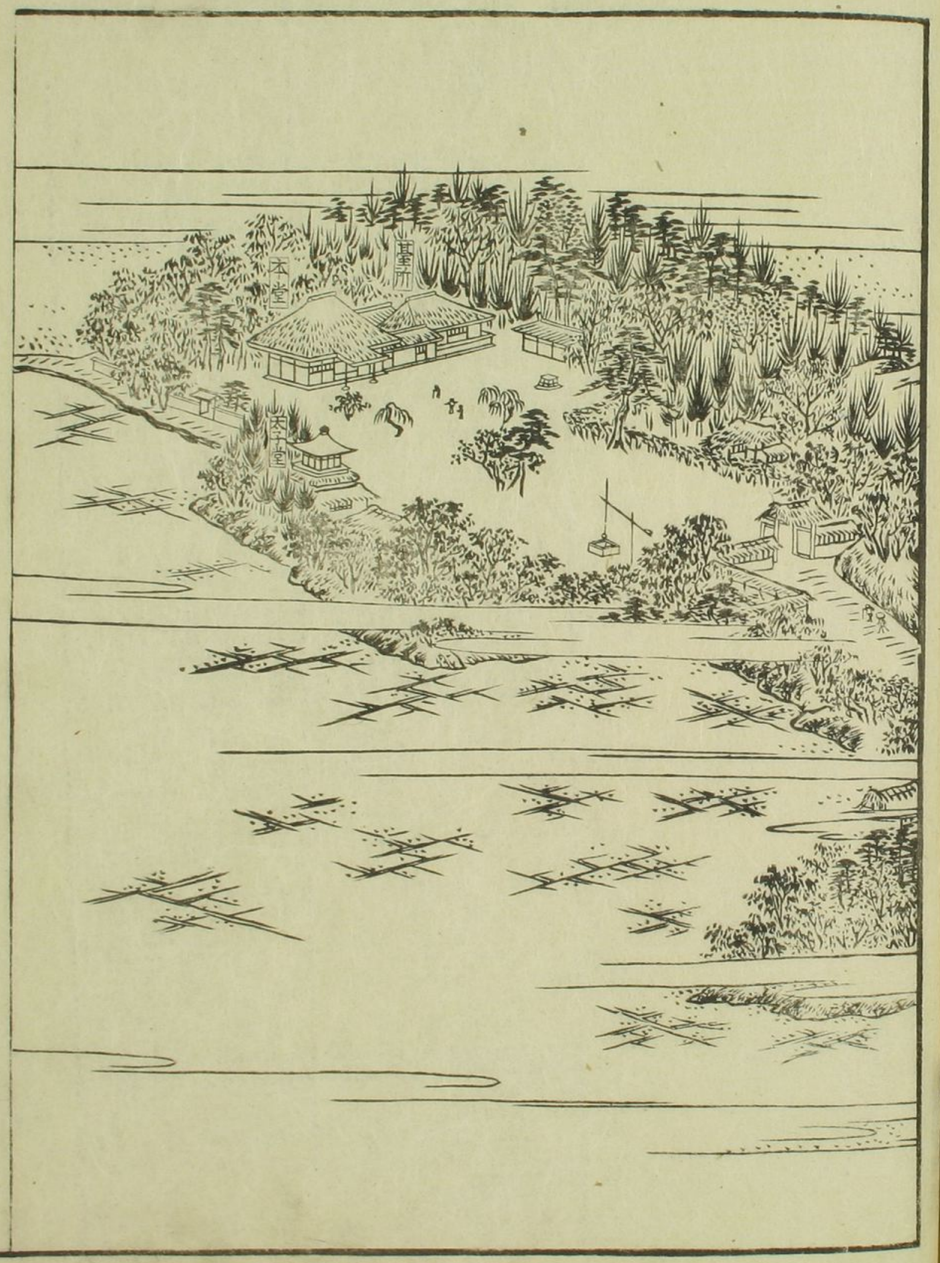
○當山より西多度へ云不あり古人の説より往昔西紀上人登山の折ら
女体授現ゆ女と化現し岩上より立給ひしと上人あやしみて
城遠く海辺も芝見ゆ中よりめなることそふ〜ぎ之ゆ
と吟じ給れば女とり仏の人に
つたなき波つゝみとゝろるれば是ありともあらしものを

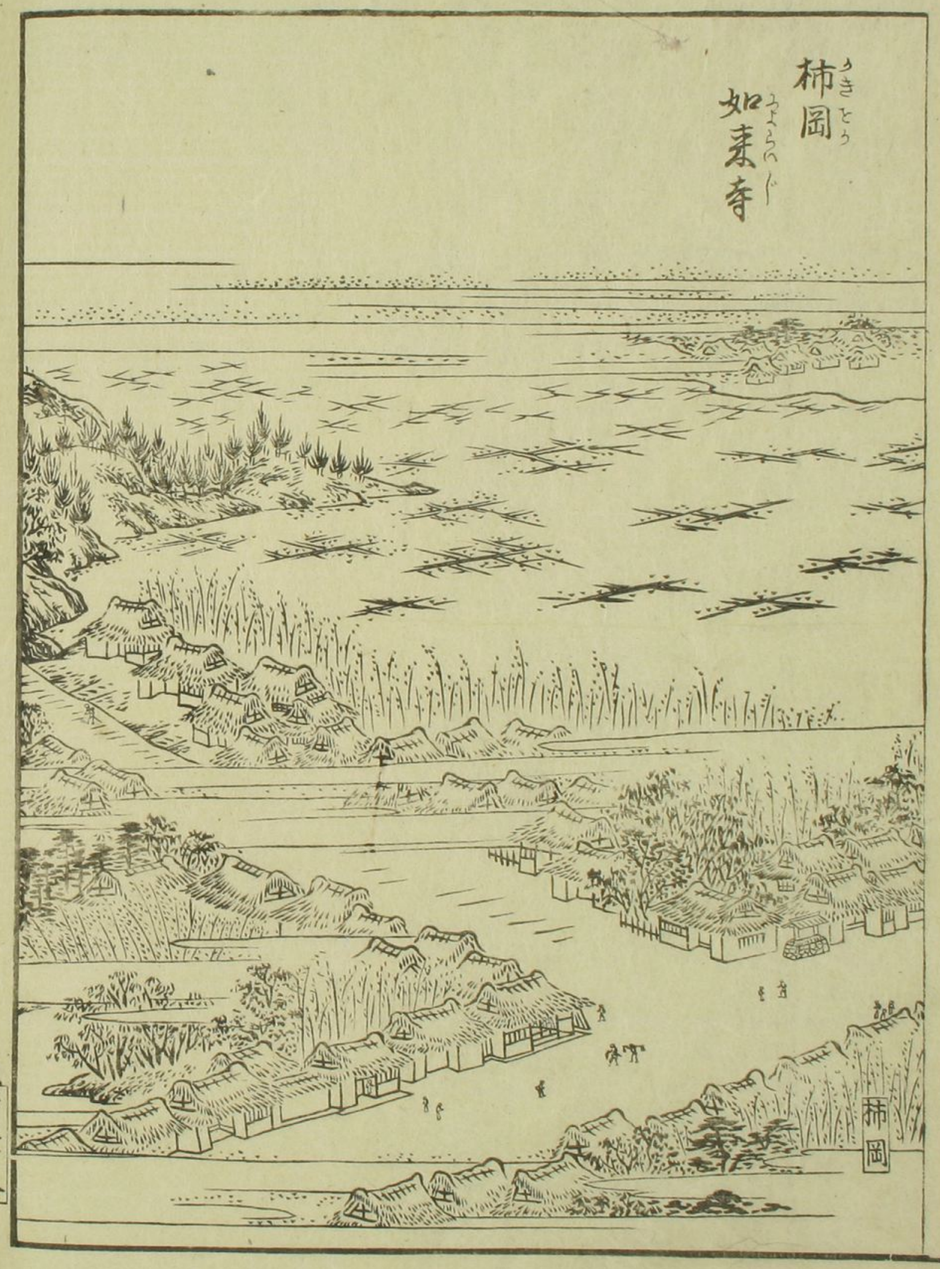
とゝろ人給ふよ上人なよゝぐらひて其石より下山のしるべよろく
名づゝとぞ

○ゝよの川い男体山女体山の二の山より流を出二流相合して一つと
なる水上と揚川とゝひ来をゝるの川ゝゝゝゝ授現の宮居の辺
ゝゝく揚樹多〜赤よ号〜〜陽成院の御製よ
後撰
はゝくゝゝゝの嶺より出つゝるれ川意そつゝりてふち瀬
百人一首玄石抄よ此御歌の源よゝるの川の末い揚川へ出つゝるとゝり
つゝどねより表砂の中をゝぐりて河ゝゝゝ人に一滴で流て末い河と
なるとゝ云石の説と大よ題歌せり年代のたゝひへすつて地名
沿革せるもやさゝ〜川奥そこの歌よ
羅常より也表べよゝれい揚川ゝゝれ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

帰命山如来寺　東流　月園日郷　柿岡あり

無量壽院と号し僧坊二區
當院い宗祖聖人御造立の寺系ゝゝく二十代業筭代南荘
乗光御房の遺跡なり乗光房いり武人ゝて俗姓を藤


山門
本堂
天子堂


柿岡
如来寺
柿岡

原孫子内大臣の後裔尾張守親綱とく幼より武勇を超
絶し力あくまぐ強く万夫不当の驍勇なり然るに富国
の名業よりまさるまや舎兄廉潔の御官行岡尾張權守信親
廉潔大明神重人と渇仰のあまり御系図を撰り信渕と号し明神の託宣あり
御製給まし〳〵法名を授り信渕と号し
人々帰依〳〵甚り念佛の行者となりしうば親綱もとより聖
聖人の化導と蒙り忽安心獲得して竟に門徒に加わり
貞應元年 其後六年を歴て安貞元年聖人岡崎信田郡霞浦
の海中より光明出現の弥陀の本像を感得し給ひ即其
地信田の浦浜とよるに押ひて一字を建立し如来寺と号
て勧化教導し給ひ後彼寺を乗願房に附属し給ふ
よりて以来乗願御房如来寺と相続し専ら弘法化益を
いつしら妨碍のなる此浦南荘の舊地廢退に及び

を後人今の柿岡に移して再興をとゝ云〇什宝 古る本像
春日の他 る幅名号 法然上人御筆 六字名号 高祖の御真筆なり流の名号とゝ伝へ云
〇給ふ然る岡崎御化導の折〳〵笠間の郡〳〵德義村馬私大師とゝ号し即五筆和尚の
旧跡ゆ〳〵てこゝに其遺墨あまた不義ぜる様にて聖人〳〵〳〵給て是を見給ひてこれを掩擬〳〵給ふ云滅る番通の御名号〳〵は幸かり其發願給し怒猥
の叢籠渇琪の流を離ぶとし其絶妙なるを元憲の及ぶ所にあらざる是を以て思ふに今附聖
人の御真蹟とゝろもの系統流大師
流の二神あるを知るべし

因に云被德義村馬橋大師とゝ号し給ふ弘仁の比弘法大師岡崎を経歴
ありしを長者德義なる者の家に適し此地を教日と選り給ふ家を
長者の源窓とゝ〳〵姫とゝ〳〵こと二八の美淑なる花そなるこの親を也
風を乳〳〵抑の髪のいとたをやかなる生まれる長者夫婦ご愛愛滅を
掌中の珠と愛るおろく変を絶すいるり〳〵然るに月の限りの
病をそこ医療さま〳〵なりとゝくとも験其なしるく次第に面瘦
ていと物うるしきさまなれば夫婦い大に是を憂とひ万金の
たゝ〳〵を尽ふるも物の教ゆる彼一人なるはゆゑとひさふる其法を需々
を中を三折の功を積る巫医これを勝察〳〵て思へらく此病い是
外感の不治なり〳〵心中を深く思ひ労るをありて絶を奪薬せ〳〵者

色即是空
空即是色
はらへたこの御
なるぞ〜
戸倉姫懸想
大師得若因

されば我等も甚そのことを叶へんとて外に薬石の術を尽しとあらう
夫婦はいよ〳〵あきれまどひ即優婆の者をして私にこれをうらゝ
問しむるにさらに是は思ひに死なん身の死るが同じくも打安へん
と思ふおりかれが姫はなほしき中よりもまた病気に数とよげ何とう
つゝ待らんいつぞやより我家に御せ給ふ御僧をそこかいまなく見し
より思ひのふちに志つくしが人にも知らさぬ分に仏体を
得給ふ御出家に懸想しきぬへきをさきよと業度思ひくらせ
どもまよひの雲の消やる時は今は空ゆへ死なん命せめてはそのさま
字安中ならるるぞ優婆まれなる傍より夫婦にかくと告しかが
あるまなりとは云ながら窮愛のあまりいかにもして此事を叶へ
得させんものと太師を請して長者夫婦のものあまた姫が死を
たすけ給へと平に歎きけるに太師いと便なきことにおもほしめし即側
にある楠の構に自ら御姿をうつさせ給ひこれを授け給ひしが
不思議やそろり姫此御姿を見るより忽煩悩の雲霧晴まさり
真如実相の観念ふかく直に長なる黒髪をきりさげて切拂ひ
正髪尼と号し終に菩提の道に入ければ長者夫婦もともに
みのりに引されて数多のたからを抛布引山といへる高山を切開
せし寺の伽藍を建立しこれを布引山金剛光院徳花寺と号しと

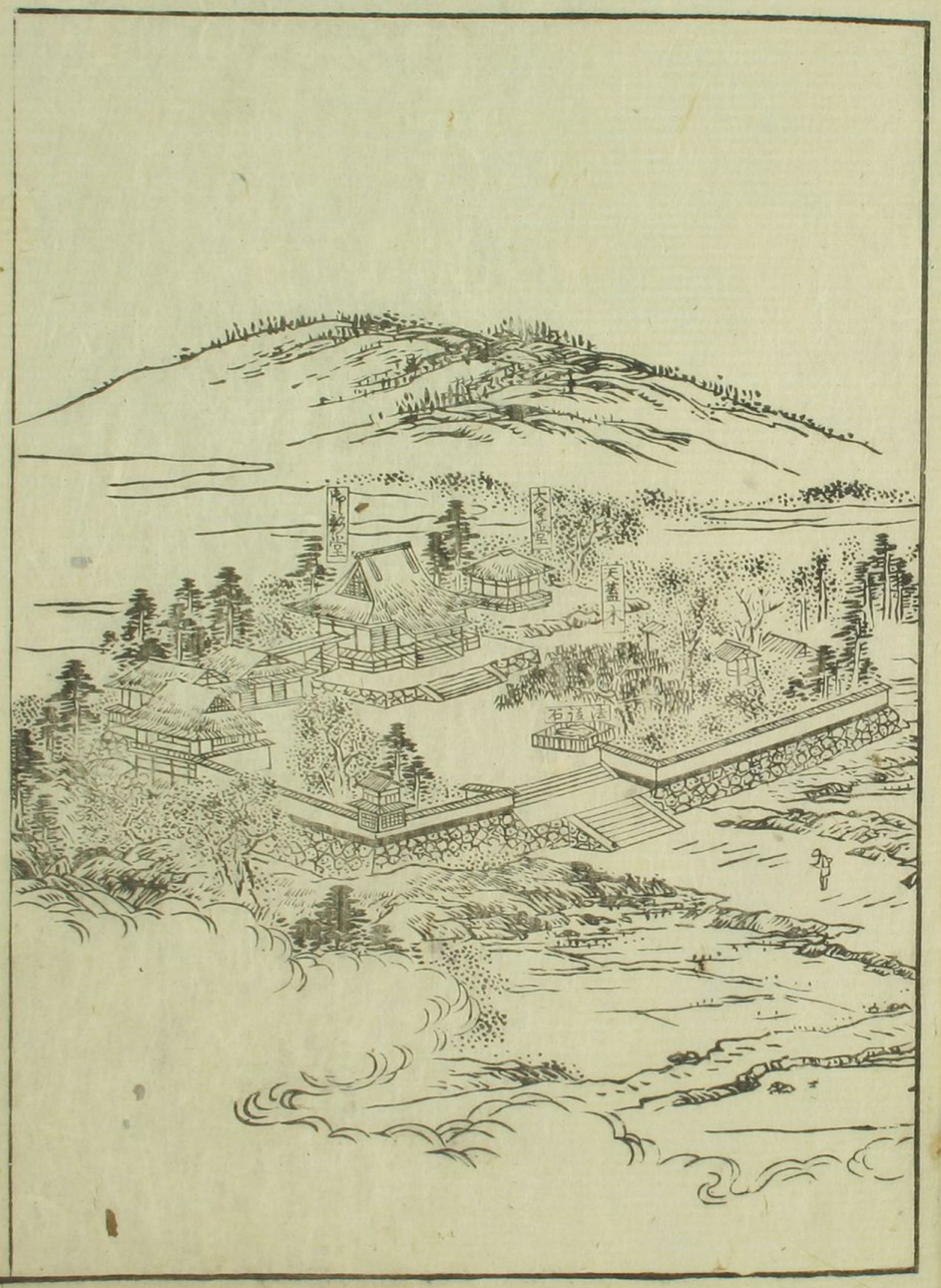
かや其後永延の比猶当国盛の事ありしが彼太師の御影を
布引の滝に入せ給ひしも換じ給はざりしは滝に埋若の奇特いちじるし
是より火除の太師とはいふなり

○小野御牧は今はさびたり当国信田郡小野村といへるは其旧地なりとぞ

大學堂

同国同郡大増村の東北板敷山のふもと往来の傍にあり

聖人当国稲田にまし〳〵せし比府中より稲田に帰らせた
まふ道板敷山の峯をこえて大増村のあたりより当国山
の東を通らせ給ひしに思ひもよらざる彼山の林藪なる深淵
より其長三丈余りの大蛇逆巻浪を押まけて聖人の方にむ
かひ延へとして進みしは身の毛もよだちて恐ろし されども
聖人少しも動じ給はず徐に歩み寄給ひ伱今出るは何
のためぞや柳害心を去て善因を求めんと欲するやねがはくば
億劫の悪業をかさね解脱を得る意なきやと宣ひける


天蓋木
石燈籠

大学堂
正覺寺
手水井
大蛇つか
大塔村

大蛇逢解脱
弥陀名号の利益は大蛇即得往生
以彼海辺
が天下をえたる三人の親いもの
ろくんをく

又蛇忽既をうるゝ両眼う涙を灑ぎひとへに渇仰の
けしきをへ〻れば聖人かさゝて云く汝我佛法を扶ひくるを
見まぐるなせる諸悪業も改悔懺悔の功徳によりて古ち
得脱疑ひなしさるあるを伝今霄のうち我を稲田の坊舎に
訪ひ来りば必蛇身解脱の法を授くべしとく絶に聖人
まかりらせ給へるふ其後母子の女
ものあり聖人よくもさとり給ひ即扇を用ひてやしば給へる女
い涙をゝ〻ぐ聖人の前に額きく妻い元来当国椋の村何某の
者の妻なりしが性質慳貪にして貧窮の男ひ後世の苦患い家を捨て唯生前の
財をれがいまはしきりとのゝ男ひ後世の苦患い家を捨て唯生前の
悪業によりまひまの悪妻と悪き瞋恚のかむ〻胸をとゞしく
止附るく絶に狂乱〻て乱〻るゝ多年の悪業一附に報

ひ今かく蛇形の苦をうけ常に水中に住るゝ身
を三熱にこがされ鞭甲外に焼しとゝ〻ぐ百千の毒虫
其内にあるく肌を咬むに針をれて刺すがごと
何られ耐ゝい聖人化益の利生をれて此大苦悩を脱ひ給
へとなく〻懺悔とゝ聖人青特の男ひとゝ
即一封の血脈を授けて云く昔海底の龍女い如来の法を
信受〻て即身即佛の果をうけ摩竭の大魚い佛の御
名を信じ奉り暴心を翻へ〻て菩提を得う見此一
封い即如来一分徳の名号及ひ妙法名なりこれい本
師法皇の弥陀尊い煩悩悪業の衆生をあはれを脱り世後人
を汝勢く結へるゝ一向一心に帰〻て教に第〻せよ
変定往生せんものなりこれ〻報謝の称名唯南无阿弥

陀佛と唱へ給へ〳〵と誡め教化給ひしかば如いかに成
頂戴き嬉しく系聖人を伏拜〳〵何不思議なる其後義経
も彼淵の大蛇死して水上に浮ひ〳〵と沙汰〳〵なれば聖人
即ち〳〵こいとりて足給ふに猶ほの一封を取よいできうり此
を拾ひて聖人星人を語ひ給ひ彼屍を去中に埋て塚と築
三日三夜法莚を設けて念佛〳〵給ひるがかくと安すり諸
方の系論市を見てたどひ来るるぐふ聖人対こそ来ると
思〳〵巳大蛇と縁として妄信邪見の者を教化〳〵給ふう
眼前因果の理を恐る孫陀大悪の深恩なるを忽に信〳〵
利益を蒙る者数を尽〳〵と去程に今霄濁三夜と云
に何〳〵不思議なるう荘厳端厳なる天女来降〳〵聖
人を礼拝〳〵我いらし彼淵の大蛇なり厚くも尊師の御化

等に成りしかば蛇身をまぬがれ天女の果を得うり順
次は浄土に往生せんや何の疑ひうみべきさんば此大恩を謝
せんためとさらに妻川てまた人参〳〵せり廣大恩徳無窮
歓喜とるらふ称〳〵て聖人を再拝〳〵やがて白雲に乗じ
て去さり ぬとうや 明傳正 耶彼塚〳〵ふる大塚村の小なる大塚
見方り 中古鎌倉の大蛇侵伴 堂のかうに聖人植置給ひしる天蓋
本とつくる大樹あり 摘の本の ○什宝六字名号 聖人真筆うてかの
不〻 大蛇を撫〳〵たまふ

板敷山

大蛇畏りて八丁筋流の山の尾なり絶頂に富士権現
を祭まつり登りは石蛇数を一如上人御腰掛不之〻

當山は往昔高祖聖人 此人南 年記九 當國稲田御房まし〳〵て拂岡
名御教化あり巳打〳〵往返〳〵給ふ石の熟路也 此かう山と称さ
の通路 其後當國那珂郡東地尾と云石に後の優婆塞が遺弟

板敷山
板敷の
山の秋
の
夜
あしや
の
しぬて
所名
うら人
九

園晩
聖人の後
ゆうて後
武いけらに
てかくうんつけ
ゆ
松
むらしみきなが
うきうきてうれ
我をぐるる
百八回
園の後
晩聖人
の序
晩の
捨て
捨て
ゆ
号くく
ゆ
後
とうきう捨てる
不ってときの
百八回

播磨公雛園とゝ人る修験者あり（四ハ聖護院の御門人なりしが智徳兼備の人なりしゆゑ法印未賢ゑんと称して修験者の先達なれば日ゝ後鳥羽帝の御都とす）國中山伏の司として末流十二坊を提轄せり

ゑんとゝ人く諸人の尊敬大方なりしに國智徳兼備の人なれ

ば自ら別者の再来とぞやうに拡る小雛園（附ゑ来ゑ三手の比ゝや）聖人の

徳行廣大なりて世の親跡を論ぜず其化益と蒙

らざる者なくさるゝ活如来のごとく尊ゝ仏嬢きゆゑ

恩しいでや我が徳をんて先と掛んと我慢の肱をかゝげて

密ゑ此山ゑ登て咒咀の法を修〳〵（今ゑ山上ゑ石の五倫後摩壇なるの形のこれり）けれど

いるるゆゑや集ゞ修をる者ゆ法先まで一度も強ゑきゆゑ

ゆゝしき小聖人の御身ゑ御障なく壮健まて遠近の名

別なく教化のゆゑ森ゑ色ゝ称ゑと見く雛園いよ〳〵喜

心法のり此比聖人は板数山と往返ゑし給ふを寛恵の幸

後三四十七

と春屬数多かゝひつゝ各刀槍弓箭を携へ宴の坂及

彼石の谷間ゑ伏うくゑて聖人の来り給ふ不と伺ひ居ること

恐ろしけゑ（山の根のひゝうゆゆの沢ゝゝゝ百八田ゝゝゝる田地あり雛園のかゝうん春屬ゝゝ此石ゝゝゝゝゝ捆園と称ゝ石ゝゝゝ）

るあり親鸞聖道ゝゝゝ先即ち聖人の往返ゝ給ふゑ）かくて聖人い神佛擁護の御身なれば

恰も憑彩の如をを彩ひ給ふがごゝ此山の往返日ゝゝゝ

ゆゑ色ゝゝゝも雛園ゑ徒曽て遮断む者一人も色宴ゑ

地ひくゝとゝりの雛園殆奇異の思ひをゑし信〳〵切なる我

彩法も今更疑ふ不あまば石詮聖人の香剤ゑ彩むひ

面對話〳〵て其溜をも叩ぢやと思ひ遂ゑ稲田の禅室ゑ

訪ひ来りし聖人左右なく出合給ふ雛園る歓を

尽〳〵称〳〵喜り喜心忽ち消滅〳〵改悔の心頻ゑして

即あゝさまゑ日来の背懐より聖人と喜〳〵せし

辨園伏叟
後窺聖人

ゆえ遥一のぐるゞ聖人嘉驚るき法人ゑ乳ゑ
辨図いよ〳〵聖人の高徳恐摩恵悲ゑまし
〳〵無我慢心の最〳〵きゆを恥忽蜆巾篠掛とかゑぐりとて
聖人を三拜〳〵我既ゑ多年修行の功徳をれて巳海の表ゑ
えんゆを思ふの慢心ゑ忽ち嫉妬の魔障とせ未来永
劫悪道ゑ墮せんとせ〳〵せめていじ若因の擬あるや
聖人大徳の海容ゑうけく慈悲を拜〳〵まるゆ実う優
曇曼陀羅華の三る年れ表ゑ値ることちゑて懸念一附ゑ
教〳〵法徳のるきを仰ぎまれば今と修せ〳〵胎金ゑ部
瑜伽三密の功力ゑ何うれせん厳く聖人縁をゑ法ひ
一語行言の示教ゑ恐らば長く門徒ゑ陪侍せん〳〵信心
無二の懺悔のありさま聖人奇特ゑ思〳〵ゑ初示して宣ふ

ゆう夫我真宗の法ゑるやたとひ極重悪人ゑうゑゑ弥陀
成佛の本願ゑれば我ゑのあやまちを深く歎き一向ゑた
ゆけ法人とゆさん人い進う往生ゑ遂ぐらん而来い報恩謝
徳の称名ゑ怠ゑるゆみぐうばとく即ゑゑまうせて勇ゑ
とゆ法名を明位房微信とゑ法ひうう
係しゆう以来聖人ゑ常陸給仕〳〵秘の嘉相引ゑて来
瀕悪悪の姿ゑ恐ゑ張ゑる弓の歎いつ〳〵ゑ西ゑ入さの
月と詠むることゑみぐゑゑ其後月園松原ゑ抽ひて一宇ゑ建
立〳〵上宮寺と号〳〵弘法化益ゑ聖人御帰洛の
後い猶原ゑ深居〳〵て信心堅固ゑ称名ゑゑゑゑゑ抽ま
ゑるゑ光ゑ建長三年十月十三日六十八歳を一期と臨ゑ
度往生ゑ遂らゑゑ〳〵ゑ滅や当山い迷心ゑ人ゑく真性得悟の

干時弘長三十二歳二十巳葉并十九番 砂山巳

若縁を結びしるの霊場なり御傳授より順逆の二縁をへ
なりとゝくども老僧より高祖聖人威神霊験の洪徳衰弱
もるるなりとゝく

稲田山西念寺　本流　日国茨木郡稲田郷より

東御門跡の御懸所なり稲養院と号し往昔高祖聖人二十
九歳の御時六角堂参詣世菩薩の霊告を蒙り給ひし其
後寿合ひ給ふ所の勝地なりして十餘年の間御居住ましま
し真法利生あるる芳跡也○本尊阿弥陀仏　恵心僧都の作
僧舎三區あり当院い建保五年の春高祖聖人　干時御年四十八歳　当
国小島郷より此地に移りて国静の地に一宇を建立なし
給ひ幽栖を占給ふに蓬蒿瓦を埋み桃李言はざるども
麦秋道俗御法を尋ひ緇素老弱法味に引されつゝの

ゆるは不世出まゝ群集と云聖人と帰依し敬重
の恰も世尊在世のごし実に抑聖人ひめぐし給ふ
中う仏法弘通の本願既に成就し衆生利益の宿念忽
に満足に先全く当初教世菩薩の告命今に抑て寿合
せりとゝく大に歓喜せ給ひ即精舎建命して歓喜踊躍山
浄真寺と称し給ふ其後聖人　干時御年六十歳　御弟子西性御房
に附属し御帰洛ありせ給ひしに西性御房即当院
を受持し給ふ数年なりしに悩いる長史のごとく霊場
悉く灰燼となるる程に実に総州磯部信仰に沼
多八次郎に預ける後の後州高田に安在ありと云　今城後高
田門坊　聖人御真影まで稲田御坊と
若胜十八講り給ふ二十ヶ条の掟書と物語り　かくて浄真寺他邦に移賜せしうば笠間
慶養房　俗姓い当国の住人源家の子孫稲田九郎教重と書き奉り或書の達人方り拾ふ宿因に
其附と得て聖人に習しなり本願寺教団第一要の要法を受しより入道に撰ばれる撰玉

稲田山
西念寺
光照寺

うちまち六根通を設て連城の壁の光耀を発し直に剃髪染衣の姿となり聖人第二の
御弟子となりしかば俗名を其まゝ北重房覚善とぞ法号を賜ひけり聖人御帰洛の後まで
笠間にあり留りて弘法
教化をなしけり

の子孫代々光を継き即稲田の霊蹟を再興しこれを西念寺と称じて聖人十余ヶ年安住教化ましませし布金の芳趾を伝持せる事識に宗祖の太臣と謂つべし

上来は大谷遺跡録を以て筆記せり然るに享保の記には稲田御坊は聖人御故洛の後北条重房に譲り与へ給へるなり又享保の記及び諸録人口に伝ふる処は聖人稲田の寓住は十ヶ年の間なりといへるに遺跡録には十六ヶ年の御淹留なりと記せり姑らく異説をあげて後来の識者を待のみ

○什宝 康済大明神御寄附の御戸帳

高祖聖人御真筆十字名号 康済大明神光をはなち聖人と御対坐の御影

聖人御直作の聖徳太子の本像 以上三品は伝へて康済明神の条りに出されば此に畧す

康済井 本堂の西広庭にあり 当年聖人当院に御淹留の折から境内の井水何逸濁りて大に悪へさせ給ひしかば即康済明神七ツ井の内一ツを寄附し給ひける水の霊水なり其時の御祈誓ひさしく今なり毎年六月十八日は井水をかへて康済へ奉るといふ委くは明神の縁記に出を

御杖杉 聖人杖の本の杖を自らさし置給ひしに忽根芽を生じ枝葉繁茂して遂に巨木となりしが惜いるに近年枯たれどもまづりて遺株をのせりかさうるに若木ありて先年上如上人本国御下向の時とぎり植置給へるところ也

三度栗 寺より三丁許南桜川のむかふにある栗の林これなり聖人紙幾にましませし時上野が家にて入らせ給ふ時にこの処の人より小栗二百をもちて聖人に献ぜしに其内に三顆を撰給ひて三度栗の種なりとてみづから光る聖人の光に栗子を嗜む給ふ御心なりと順信房が筆記に見へたり

稲田姫宮 今根橋を越て大道より西の方にあり素盞烏尊の妃稲田姫をまつれるなり毎年九月十八日祭礼あり

朝姫の墓 又稲田姫の墓ともいふ宮よりいひて凡より東へ入農家のうしろにある塚なるべく光即玉日の宮の御墓あまつて彼姫の侍女池田が姫是真古氏に亦をすかし世を経して御墓を守るゆへとなん毎年九月十八日稲田姫の宮と同じく玉日の宮の御祭礼として二処にこれを祀るとかや朝姫玉日の宮の御事其説まちまちなりといへども既に下総国結城称名寺の条下に委しく論ずれば畧之

笠間光照寺 東派 同郡笠間の城下にあり

当院は高祖の直弟北条房教養法師 信州西念寺の条下に出 の開基にして専ら弘法教導ありし芳趾なり中古止事なき御方より高祖聖人の御影及び六角堂救世菩薩聖人に告命し給ふ所の御影を自ら画せ給ひ当院に奉納なしまします今これを安置せりといふ

親鸞聖人御旧跡二十四輩巡拝図会後編巻之二終